

32 学生野球の神様、飛田穂洲さんに単独インタビュー

野球部石井連蔵監督の「心・技・体」の師匠は、野球部初代監督というばかりでなく、郷里・水戸の大先輩でもある飛田穂洲（忠順）氏であることは周知の話だった。飛田さんは私たちが学生の頃、かなりの高齢（74、5歳）であった。その頃も朝日新聞に学生野球の記事を書くマスコミ人でもあった。早稲田野球部の基盤を築いた人でもある。学生野球にとって飛田さんは神様と言われていた。特に飛田野球理論は早稲田野球のバックボーンになっていた。精神的にも技術的にも早稲田野球部にとっては神様のような存在であった。飛田さんの野球の真髄はいつも言う「一球入魂」に籠められている。

昭和三十年代の中ごろ、飛田さんは元気だった。六大学の試合がある時は必ず水戸から出てきて、早稲田の安部寮に泊まっていた。高校野球が始まると甲子園に通い試合の論評を朝日新聞に書いていた。部分的に文語調の言葉が入る、いわゆる飛田節である。自分も「早稲田スポーツ」で野球部の記事を書く立場、朝日に掲載されていた飛田さんの文章はいつも読んでいた。

そんな時、昭和 35（1960）年秋、早慶戦は歴史に残る大激戦を展開した。早慶戦を迎えるまで、慶応の勝ち点 4 に対し早稲田は 3 だった。早稲田はかなり苦境の中にあったが最後の早慶戦を勝てば優勝の芽はまだ残っていた。ただ、冷静に考えれば慶応優位には変わらない。「早稲田スポーツ」では、本格的に早慶戦特集号の発行を決め売り上げの拡大を狙っていた。何しろ、早慶戦特集号の発行については、すでに松井と野球担当の自分との間で激しい確執があっただけに、何としても充実した紙面を作ろうと部員全員の協力を依頼した。部員みんなも学生野球が好きだった。

1 面に「賜杯をわれらに」との大きな見出しを付けた両校の主力選手が並ぶ写真を使った。その左側に飛田穂洲さんの文章を載せた。この文章こそ、安部寮で飛田さんに初めて会って依頼した思い出深いものである。筆者（飛田穂洲）の名前は、会った時に書いてもらった毛筆の文字を使った。飛田さんの「早慶戦こそ 学生野球の生命」と、見出しがついた文章には、飛田さんの早慶戦に対する大きな期待がこめられていた。

この文章ができるまでにはさまざまな経緯があった。編集会議で、1 面に飛田さんの原稿を掲載することが決まってから、自分の慌ただしさも半端ではなかった。まずは飛田さんに会って原稿依頼をすることが第一歩であり、その任務は当然、野球担当の自分に課せられた。その年（昭和 35 年）の春も、「早慶戦特集号」を制作している。特集号の第 1 号ともいうべき新聞であった。第 1 号では、途中から入部して来た先輩部員の葦澤元康さん、伊藤昌俊さん、さらに後輩の堤哲、堀健雄、山崎英夫君などの頑張りが目立った。特に葦澤さんは新聞の第 2 面全部を使って「野球 早慶戦物語」を書いた。これは文章量も多く、内容も濃い特筆に値するものだった。取材原稿をとり入れた文章はさすが先輩と思わせた。また、初の「早慶戦特集号」の 1 面は入部間もない伊藤昌俊さんが撮った、両校の主将（早稲田・徳武定之、慶応・渡海昇二）が握手する写真を使った。先輩部員たちの力を随分借りた新聞であった。紙面全体は今考えれば、かなり地味

なものであるが、自分たちにとっては上出来の「早慶戦特集号」だった。

飛田穂洲さんに早慶戦特集号の原稿依頼をするため、まずマネジャー黒須睦男さんに会った。早慶戦特集号の発行趣旨を説明し、直接、飛田さんに会いたい旨を伝えた。黒須さんはすでに何回も書いたが、礼儀正しい真面目な先輩である。「必ず早稲田スポーツの意向を飛田さんに伝えて会えるようにする」と約束してくれた。数日後、黒須さんから連絡が入り、飛田さんに会う日が決まったと伝えてきた。秋のリーグ戦が始まって間もない頃だった。飛田さんが「早稲田スポーツ」を知っていたかどうかは知る由もなかったが、快い返事にホッとした。当日はノート1冊を持って、早稲田通りから少し入った住宅街にある野球部の安部寮に行くと、玄関で黒須さんが待っていた。

安部寮の応接室に入るのは初めてだった。通常、安部寮に黒須さんを訪ねる場合は、いつも玄関口か玄関の中の三和土（たたき）での立ち話だった。安部寮は古い建物だけに、応接室も何となくクラシックな感じの部屋である。間もなく、飛田さんが部屋に入って来た。神宮球場では姿を見かけていたが、直接会うのはもちろん初めてである。驚くほど小柄な人だった。応接室に入ってから「早稲田スポーツ」創刊の趣旨や経緯などを簡単に話した。「学生野球の神様」を前に、やはり、こちらは緊張していた。飛田さんが話す言葉はかなり強い茨城弁交じりであった。野球部監督石井連蔵さんと同様のイントネーションだった。良く聞かないと聞き取れないほどだった。静かな語り口の中にも力がこもった言葉が出てきた。応接ソファの飛田さんの横には黒須睦男さんが座り、自分とは差し向かいになった。飛田さんは、自身の野球の経歴や、最近の早稲田野球の感想などを話した後に、野球の早慶戦こそ学生スポーツの原点であり、それに相応しいプレーをしなければならないことを力説した。飛田さんが話す言葉を聞き漏らすまいと耳を傾け、その言葉をノートにとるのは大変な作業だった。話の中には早稲田野球の神髄がかなり盛り込まれていて、そんな時の飛田さんの声は一段と大きくなった。話を聞いていたのが30分だったか1時間だったか、はっきりとは覚えてはいない。

最後に飛田さんは、「今日、話したことを君がまとめて書いて持ってきて下さい。それをボクが読んで直す」と言う。そして、突然、黒須さんに硯と墨を持ってくるように言った。黒須さんが持ってきた書道用具を使って、飛田さんは自らの名前を半紙に「飛田穂洲」と大きく書いた。3枚書いて「君の気に入ったものを持って行きなさい、新聞に使っても良い」と言う。当然とはいえ当然であるが、飛田さんがチェックをすると聞いたときには一瞬ビクッとした。その晩は寝ないで原稿を書いた。

飛田さんに会っていた時間は、早稲田の選手はみんな安部球場で練習に汗を流している頃だった。翌日、飛田さんは選手にどんな話をするのだろうか、余計なことを考えながら帰ってきた。

翌日、眠い目をこすりながら、グラウンド坂上の安部寮に原稿を持って行った。黒須さんはにこやかな表情で、原稿を受け取った。日を置かずに黒須さんから電話があり、安部寮に行くと封筒に入った原稿が戻っていた。何と、ほとんど直しが入っていなかった。

インタビューの間、一心にペンを走らせ、飛田さんの言うことを一語とも漏らしてはならないと懸命に書いていたのが役立ったのだ。この原稿は、昭和 35（1960）年秋の「早慶戦特集号」の 1 面左側を飾った「早慶戦こそ学生野球の生命—飛田穂洲」という記事である。

さらに、後日談として一つの話が加わる。平成 4（1992）年の秋、偶然、本屋の店先で手に取った『「神宮の森の伝説」—60 年秋早慶六連戦—』（長尾三郎著・文藝春秋社刊）という本だった。私たちの青春の 1 ページである早慶 6 連戦が本になったのだと、何気なく手に取ると、最初の方に、あの飛田さんの文章が出ているではないか。「早稲田スポーツ」昭和 35 年秋の「早慶戦特集号」の 1 面記事を引用していた。しかし、その文章は、当然であるが、飛田穂洲の文章として長尾氏は扱っていた。この本を買って帰ったのは言うまでもない。

再び、早慶 6 連戦に絡めて飛田さんのことを書く。しかし、既述した文章と重複する部分があることを断りたい。

昭和 35（1960）年秋のリーグ戦は慶応優位のままで迎えた。早稲田の監督は飛田穂洲の愛弟子、水戸一高出身の石井連蔵。慶応は知性派と言われた前田祐吉（旧高知城東中）、いずれも青年監督と言われた二人が指揮を執っていた。慶応は早慶戦で早稲田に勝って勝ち点を上げれば優勝、早稲田は慶応に勝って勝ち点をとっても同率。優勝決定戦に臨むことになる。早稲田は何としても勝ち点を取らなければならない。

自ずと両校の心構えが違っていただろう。それは決戦前の両校の練習取材を通して分かった。早稲田安部球場の練習は猛烈を極めた。連日、日の暮れるまで石井監督の猛ノックがグラウンド中に響いた。まさに血の出るような練習とは、この練習を言うのかもしれないと思った。戦前、「最後の早慶戦」が行われた安部球場の老朽化も甚だしく、古いコンクリートのスタンドはいつ崩れても不思議ではない状態にあったが、そのスタンドに連日、多くの早稲田ファンが押しかけて、猛練習を見守っていた。熱心な早稲田野球のファンは、ある時は大きな声で選手を励ましていたが、どちらかと言えば石井連蔵の気迫に押されていたようだった。あるいは石井の怒声と迫力にファンの方が酔いしれていたのかもしれない。選手たちは徳武定之主将以下、全員が涙を流しながら鬼の形相の石井のノックボールに食らいついていた。

一方、日吉の慶応グラウンドへ行ったら驚いた。鬼はいないが仏がいた。日吉駅から西方へ 15 分ほど歩いた所にグラウンドがあった。周りは畑ばかりで早稲田の方が都会のグラウンドという感じだ。最初に驚いたのは、選手たちの顔が非常に明るいことだった。誰一人として涙を流してボールを受けている者はいない。周囲の畑の雰囲気と合わせて実に長閑に思えた。選手一人ひとりの長所を監督が引き出しながら練習を重ねているという感じだった。掛け声はあるが、怒声は全くない。前田祐吉監督は常に柔和な顔でノックバットを振っていた。こうした明るい雰囲気は周囲の畑にもマッチしていた。

さらに驚いたのは練習が終わってからだった。下級生は野球道具やベース板などを

片づけたり、グラウンドの土を木製の「レーキ」でならしたりしていた。ところが、上級生はと言えば、何と監督と一緒に煙草を吸っているではないか。監督に火をもらっている者もいる。早稲田から来た人間にはとても信じられない光景だ。早稲田では監督に面と向かって話など、先ずできない。監督は神様のような存在になっていたのである。前田監督は早稲田から来た自分に対しても紳士的だった。礼儀正しい応対をしてくれたのである。一人の人間として接してくれ、慶応の今シーズンの戦力分析までやってくれた。

両校の練習風景にこれほどの差があるとは思っていなかっただけに、ショックも大きかった。どちらが運動部の練習として正しいか、あるいは常識的なものか判断に困ったのは事実である。両校の対比が明確なだけに、新聞記事としては書きやすいのかもしれない。しかし、実際は書きにくかった。両校の練習を対比するにはどうしても鬼の石井連蔵が悪になり、仏の前田裕吉は善になってしまう。早稲田の学生としてはその対比を簡単には書けない。書きやすい分析であるが、筆が進まなかったのは事実である。

「早稲田スポーツ」の発行も2年目に入り、相変らず財政的な苦しさが続いていたが、新聞制作自体には慣れてきた。「これで広告収入が安定すれば問題はない」と、松井と二人で語り合ったものだった。ことに、1年遅れて入部してきた下級生はみんな新聞制作に熱心で、その上文章も上手だった。安心して運動部を担当させることができた。余談だが、下級生の堤哲、堀健雄、山崎英夫らは揃って背が大きく、ハンサムな学生ばかりで、創刊期のメンバーが揃って小柄な人間ばかりだったのとは対照的だった。

この秋の「早慶戦特集号」（昭和35年11月発行）は部にとって、2回目の特集号発行になる。部員一致して「早慶戦特集号」に取り組む姿は、野球担当の自分としては、大きな喜びだった。編集会議でも部員みんなが活発に発言をし、みんな揃って「早慶戦特集号」の制作に取り組んだ。これなら、きっと素晴らし特集号ができるに違いないと確信していた。1面には、両校の有力選手六人を並べた写真を載せた。写真は部内の人間では撮れなくてスポーツニッポン新聞社から借りたものを使った。その左隣に囲みで前述の飛田穂洲の寄稿文を載せた。また、1面下段に「私の観戦」とのタイトルで両校の総長（大浜信泉）・塾長（高村象平）の言葉を載せた。さらに、両校の監督（石井連蔵・前田祐吉）の言葉を載せた。制作当時、この紙面はかなり迫力があると自信を持ったものだった。創刊号に寄稿文を寄せた早稲田の大浜信泉総長にはその後もたびたび「早稲田スポーツ」紙面に登場してもらっている。

飛田穂洲さんの本名は忠順（タダヨリ）。「早稲田スポーツ」早慶戦特集号の1面左に掲載した飛田さんの文章中の毛筆の「飛田穂洲」という文字には味がある。飛田さんが自分の目の前で筆を使って書いたもので忘れられない一筆である。新聞創刊後、約1年にして学生野球の神さまと言われた飛田穂洲さんに会って文章をもらえとは思っていなかっただけに、この文章は嬉しかった。この人の文章が載らなければ「早稲田スポーツ」の価値も上がらなかった。後から考えると、ノンフィクション作家・長尾三郎が

自らの著作に引用するほど、内容のある文章だったのかもしれない。飛田穂洲さんは毎週金曜日の夜、水戸から早稲田の安部寮に来るといふ。自分が会った頃の飛田さんは70代半ば、まだ元気だった。早稲田では初代監督に就任し、後に「最後の早慶戦」の実現に慶應との折衝に奔走したといふ。早くからマスコミに関係し、報知新聞（昔の）、読売新聞、朝日新聞に記事を書いた。郷里の茨城県大場村（現水戸市）では村長を務めている。子息は東大野球部主将を務めた人である。飛田さんが言う「一球入魂」は「練習でできないことは試合でもできない、目の前の一球の大切さを知れ」という意味があると言った。「毎日スポーツ賞」「紫綬褒章」「朝日文化賞」に加え「野球殿堂」入りを果たしている（この項、一部ウィキペディア）。飛田さんに会った時に聞いた「一球入魂」の読み方は「イッキュウジッコン」であった。

33 「早稲田スポーツ」創刊号の販売は構内メインストリートで

「早稲田スポーツ」の創刊号が出来上がり、構内のどこで販売をするのかは部員の大きな関心事であった。当時は学生運動花盛りの時代で、早稲田の構内はどこも革マル派などの派手な立て看板で埋まっていた。その上、なり振り構わぬスピーカーの声も大きく、構内全体が騒然としていた。

部員が構内で新聞を販売するのは当然初めての経験だが、極めて重要なことであり、緊張しないわけではない。刷り上がって間もない「早稲田スポーツ」を体育館事務所に持ち込んだ時のインクの匂いが、それほど広くない体育館事務所の中で、強い香りを放っていた感じがいつまでも鼻に残っていた。早稲田の構内は狭いようでも歩くと、けっこう広い。毎日登校してくる学生に新聞を知ってもらうには、かなりの数の販売拠点を作らなければならない。しかし、部員も少なく、実際には構内に1ヵ所作るのが精一杯だった。そこで、1ヵ所しか販売拠点ができないのなら、せめて場所だけは良い所を確保しなければならない。あらかじめ、滝口宏学生部長には「早稲田スポーツ」の創刊についての話はしてあったが、事務的な事項は改めて管轄の事務所に許可をもらわなければならない。こういう交渉は山崎茂が得意だった。さっそく、学生部に行って話をまとめてきた。しかも、机と椅子もどこからか調達してくるほど手回しが良かった。これで学内での創刊号販売の準備は整った。立て看板用のベニヤ板も山崎がどこから持ってきた。大きな板に紙を貼り「早稲田スポーツ新聞創刊!」「早慶戦を勝利」「スポーツのことなら早稲田スポーツで!」などと大きな文字も山崎が書いた。販売はみんなで手分けして椅子に座った。販売価格は一部10円だった。その後も新しい新聞ができると創刊号と同じように大隈講堂の前の正面階段を上った右側に販売用の机と椅子と立て看板を置いた。昭和34（1959）年秋の早慶戦が終ってから創刊号を出したので、神宮球場での早慶戦当日の販売はできなかった。今となつては、悔しさを感じるが、当時のメンバーにとっては創刊時期よりも新聞そのものの発行ができた喜びが大きかった。

学内での販売も早慶戦が終わった11月になってからである。一部10円で販売した。

「早稲田スポーツ」の販売をしている中で、妙な出会いもあった。創刊号発行後、しばらく経ってからか、翌年のことだったか。ある日の夕方、自分は他の部員と一緒に販売用の机にいた。すると、大きな男が、自分の名前を呼びながら机に向かって歩いてきた。一瞬誰だと驚いたが、紛れもなく自分の従弟で、銀座に住む叔父の息子であった。早実で野球をやり、政経2部へ入ったばかりの頃である。彼は親の仕事を継ぐべく昼間は築地の市場で働き、夜は早稲田に通っていた。自分が編集やら何やらで、柏の実家へ帰れない時に、泊めてもらっていた家の息子である。しかし、大学で従弟に会うのは珍しいことだった。戦時中は疎開で家に来ていたので、兄弟のような付き合いをしていた。彼は、自分が新しい新聞の発行に関わっていることを知っていたので、自分が机に座り「早稲田スポーツ」を販売していたことに驚いた様子はなかった。彼の父親は木挽町（東銀座、現在の歌舞伎座のすぐ北）に住み、築地市場で果物の仲卸をやっていて、その頃は、中央区議会議員になって、政治の世界にも力を注いでいた。自分は「早稲田スポーツ」の業務で遅くなることが多く、深夜、頻繁に叔父の家に泊めてもらっていた。地下鉄銀座駅からわりあい近く、柏の実家に比べると格段に便利な場所だった。時折会う叔父は「夜も家に帰れないほど忙しいのか、健康に気をつけなさい」と、案じてくれた。

34 新聞販売の椅子に座った滝口宏学生部長

大学のメインストリートは多くの学生と多くの教授たちが通る。「早稲田スポーツ」の販売拠点にいと、さまざまな人間の顔を見ることができる。時には、学生部長の滝口宏教授（考古学）も通りかかり「頑張れよ」の声をかけてくれる。当時、学生部長は60年安保問題で、核マルや共産党系の学生との交渉で頭を悩ませていた。

私たちの「早稲田スポーツ」はその点、運動部の記事を中心に書く学生新聞であるため、学生部長を悩ますことは全くない。大体、記事の中には思想的なものは一切ないからである。滝口さんは実に親切だった。ある時、滝口さんがメインストリートを通って私たちの新聞販売拠点に寄った。絶好の機会と思い「早稲田スポーツ」の現状報告を少し説明したことがあった。教授は多忙だったため、ごく短い時間だったが話をじっくりと聞いてくれた。「新聞づくりは楽しいだろう、早稲田スポーツは着眼点が良いので大学としても喜んでいる。ぜひ、長く続けてほしい」と激励してくれた。その時、先生は何と販売用の椅子に腰を下ろしたのだ。これには、びっくりで、私たちの方が慌ててしまった。山崎と自分が販売拠点にいた時だった。滝口さんがどっかりと椅子に座って通り過ぎる学生たちを見ていた。私たちと並んで「早稲田スポーツ」の販売に立ち会ってくれたのであった。学生部長が、学生の発行する新聞の販売机に座ったのは極めて珍しいことだったに違いない。もちろん、周りにセクトの学生がいないのを見計らって、とっさに椅子に座ったのだろう。通り過ぎる学生の多くが、なぜ学生部長の滝口さんがここに座っているのかと不思議な顔をしていた。この光景を部員の誰かがカメラに収めていたが、いつのまにか紛失してしまったのは残念だった。滝口さんは一部の学生運動家

からはかなり嫌われていたのだろうが、実に話の分かる人柄の良い先生であった。

「早稲田スポーツ」創刊時の滝口さんとの接点は既述した通りである。また、私たちは「早稲田スポーツ」を始めた頃に、滝口さんの長女が私たちと同じ学部、学科にいることを知った。当然、「早稲田スポーツ」のことは娘から父親に自然に伝わっていた可能性がある。そうしたこともあって、滝口さんは「早稲田スポーツ」に好意的だったのかもしれない。すでに書いたが、連日、学生運動家との厳しい団交が続く滝口さんにとって、「早稲田スポーツ」は癒しの存在だったのかもしれない。新聞販売など構内で行われる諸行事は全て学生部の管轄だった。教授としての滝口さんの専門は考古学であり、千葉県のかづさ古墳の発掘調査をやっていた。時折、新聞の千葉版に考古学の件で滝口さんの名前が登場していた。顔だけ見れば、厳つい感じに見えるが、話をするほどに好感が持てる人だと分り「早稲田スポーツ」の仲間内では評判が高い人だった。確か、応援部とフェンシング部の部長だった。山崎茂は何かにつけて「滝口さん、滝口さん」と言っては、学生部や教授室に出向いて、滝口さんに会っていた。内々に新聞販売用の看板掲出の許可などはもらっていたにもかかわらず、山崎は「滝口教授に大丈夫か、聞いてくる」と言っては出かけていた。

私たちが机を出して新聞を売っていると多くの学生はもとより、知り合いの教授も通る。しかし、話しかけもしないし、新聞を買ってもくれないのが普通だった。ただ、体育会系の教授は違った。激励に寄ってくれる。新聞を創刊して間もない頃、呼びつけられて叱られ、しかし直ぐに吉祥寺の家で新聞づくりの手ほどきをしてくれた新聞学の安井俊雄教授は必ず声をかけていった。

滝口さんに関してもう一つ思い出がある。自分が転職した会社に入ったばかりの、昭和40年代の頃のことである。自分の直属の上司は早稲田で学生運動をやっていたというのが定説だった。この人から、「君は滝口と言う教授を知っているか」と聞かれた。即座に学生時代の滝口さんとの関係話を話すと「良い先生だろう。ボクの学院時代のクラス担任だ。自分は随分迷惑をかけたから覚えているかどうかは分からないが…」と笑いながら言った。在学中、学生運動に明け暮れていたその上司は学院時代の滝口さんにずいぶん世話になっていたと言うのだ。この上司は仕事の最中は社内でも有名な「怖い人」で、満足に口もきけない社員もいた。しかし、仕事を離れた時の人柄は全く変わった。良く早稲田のことを聞き、趣味の奈良の文化について語った。それにしても、会社で滝口宏と言う名前を聞くとは思ってもいなかった。

財政的に苦勞していた昭和35(1960)年秋の早慶戦の思い出は、一口では語れない。早慶戦で勝ち点を落せば早稲田の優勝は消える。絶対に勝ち点を取ることが最低条件であった。幸いにも早稲田は勝ち点を挙げ優勝決定戦に持ち込むことができた。優勝決定戦は引き分けを挟みながら、結局6連戦となった。早稲田は6試合目を勝って、劇的な優勝を飾ったことはあちこちに書いた。この時の大量の新聞(「早慶戦特集号」)販売が

「早稲田スポーツ」を救った。財政面の他、部の運営にも好転をもたらしてくれた。

「早稲田スポーツ」は、早慶戦用にまず1万部を刷り、さらに決定戦になってからは、連日増刷が続き、合計5万から6万刷って完売した。6連戦が終わって直ぐの頃、松井や山崎と「10万部は売ったかな」と話したことがある。その後、後輩の厳しいチェックの結果、せいぜい6万部くらいか、と言われたが、私たちの頭の中は10万部だった。それほど、新聞販売は凄かった。増刷しても増刷しても、すぐに売り切れた。その結果、会の財政も急速に好転した。会計担当の堀健雄は滅多に見せない笑顔を振りまいていた。早慶6連戦が終わって直ぐだったか、しばらく間を置いてだったか、部員全員をグラウンド坂下の金城庵に集めて祝勝会をやった。もちろん、1部10円で売った新聞の販売代金が山ほどあり、会費ゼロ、飲み放題食い放題の宴会だった。毎日、朝から晩まで新聞販売をやり、同時に延長戦用の新聞を神奈川新聞社まで受取りに何回か往復した疲れはかなり溜まっていた。部員にとっては疲れを癒す絶好の祝勝会であった。

「早稲田スポーツ」にとって、早慶6連戦は救いの神で、その後大手企業の広告出稿も出始め、徐々にではあるが部の財政は好転した。「早慶6連戦」が「早稲田スポーツ」の命運を決めたといっても過言ではない。それまで、創刊直後から借りていた軟式庭球部監督の板野寿夫さんからの借金も全額返済することができた。神田・小川町の板野さんの会社「ウララネオン」の事務所で「この金が戻ってくるとは思っていなかった」と板野さんがニコニコしながら、お金を受け取ってくれたのが忘れられない。

早慶6連戦勝利の効果もあり、その年の幹部会で「しばらく部費を取らないでやろう」とか「夏の合宿も無料でやろう」というような取り決めをしたように記憶している。しかし、永遠に資金があるはずもなく、いつまで好機が続いたかは記憶にない。また、神宮球場で「早稲田スポーツ」を5万部あるいは6万部も販売したお陰で認知度も一挙に上り、卒業生からの予約購読も入り始めた。もちろん、それまで批判的に見ていた一部の大学体育局の関係者も何も言わなくなった。

35 「早慶戦特集号」の保管はJR信濃町駅前の葬儀社

当時、学生野球は人気絶大で早慶戦ともなると約6万人を収容する神宮球場が一杯になる。外野席は単に芝生が傾斜地に植えられていた状態でかなりの人数が入っていた。従って、観客が約6万人といわれても不思議ではなかった。この秋の早慶戦は優勝がかかっているだけに超満員になることは十分に予想された。「早稲田スポーツ」の早慶戦特集号は全部員が勢い込んで制作しただけに、創刊以来もっとも派手でページ数の多い新聞になった。最初の印刷は1万部だった。これもかなり思い切った部数だった。もっとも、「早慶戦特集号」も今のようなカラー印刷ではなくモノクロ、縮刷版で昔の新聞を見ると一面の写真が大きいだけの割合地味な感じの新聞である。早慶戦だけの3試合分を想定していた。いくら、観客が押し寄せ、試合も3回戦あったとしても1万部もあれば十分だろうというのが私たちの考えだった。しかし、問題が一つあった。通常は学

内で机と看板を出して学生相手に販売している約 3000 部の新聞の保管には問題がなかった。日頃、仮部室として使わせてもらっている体育館事務所の片隅に置けば十分だった。しかし、早慶戦は神宮球場で行われる。さて、1 万部の新聞の保管場所がなくみんなで頭を抱えた。一度は六大学野球連盟に話を持ち込んだものの見事に断られてしまった。

当時、6 大学野球連盟は事務局長である長船騏郎氏（旧天理中）が一手に仕切っていた。まだ 30 代という若さであったと思う。早稲田の野球部の先輩だと言う。シーズンが始まる前に取材を含め何回かこの事務局長に会って話をしたことがある。なかなかの堅物で、改革をあまり望まなかった。学生新聞が選手たちへの取材をしたいと言っても容易に耳を傾けてくれなかった。まして、販売用の新聞を預かってほしいなどとは聞くだけ無駄だった。かつて、野球部のマネジャー黒須陸男さんに頼んでやっと実現した「早稲田スポーツ」の新聞記者席への入場（無料）についてもかなり難渋したものだ。長船氏から見れば、まだ創刊したばかりの学生新聞「早稲田スポーツ」の何たるかも知らないことは当然である。早稲田の老舗学生新聞「早稲田大学新聞」も記者席への入場は認められてはいなかった。創刊当初から長船さんの私たちに対する対応も散々なもので、「早稲田スポーツ」発刊の趣旨も野球の神宮球場内での取材にも耳を貸してくれなかった。あくまでも、「筋が通らない」の一点張りであった。「早稲田スポーツ」の球場記者席への入場については別項でも書いたが、野球部の黒須陸男さんの努力によって打開策が講じられた。黒須マネジャーが仲介の形で神宮側と話をつけてくれたようだ。

要は、早稲田野球部が「早稲田スポーツ」の入場に関して保証人のような立場になることだった。結果、私たち「早稲田スポーツ」の野球担当は、神宮球場のネット裏の新聞記者席へ入場が認められたのである。このこと以来、「早稲田スポーツ」野球担当は、代々、野球部を通じて神宮球場の記者席での取材ができたのである。ただし、試合ごとに球場の正面で黒須さんと呼び出して入れてもらうという入り方をした。黒須さんの真面目で堂々とした対応には感謝するばかりだった。黒須さんは、3 年生、4 年生の 2 年間マネジャーを務めた伝説的なマネジャーであった。後日談になるが、この黒須さんの長女が後の早稲田の主将でエースの小宮山悟（芝浦工大柏高・ロッテ・ニューヨーク・メッツ）夫人になっている。

話が少し横道にそれてしまった。元へ戻そう。新聞の保管場所でこれほど頭を抱えるとは思っていなかった。神宮球場が新聞を保管してくれるのではないかという甘い考えを持ったことが悪かった。部員全員が集まって対策を練ったが妙案が出ない。ほとんど困っている時、1 年生の確か、山崎英夫が「信濃町の駅前に葬儀屋（帝都典礼）がある。あそこに頼んでみてはどうだろう」と言った。葬儀屋に相談とは誰もが考えなかった。言い出した 1 年生は、自ら葬儀屋へ出かけ、みごとに交渉成立。しかも学生新聞のこともあり、料金は不要とのこと。こんな有難いことはなかった。

さっそく、横浜の神奈川新聞社から 1 万部の新聞を運び、中央線信濃町駅北口前の葬

儀社「帝都典礼」に無事「早稲田スポーツ」1万部を保管することができた。6連戦目は安藤元博（3年）の快投によって早稲田が勝ち優勝を決めた。勝利の瞬間は、ネット裏の高い位置にある特別室前で外苑長の伊丹安弘さんと話し込んでいた。そのため、優勝の瞬間を見ることが写真の撮ることもできなかった。野球担当の自分の職務が果たせなかった瞬間である。しかし、早慶6連戦を勝ったことで、全ての疲れが吹っ飛び、むしろ快感を味わうことができた。

36 六大学球史に残る「早慶6連戦」一連日完売の特集号

さらに、「早慶6連戦」のことを書く。私たちも新聞発行を始めてからちょうど2年目、早慶戦特集号も2度目になり、その制作には熱が入っていた。創刊号発行の時、早慶戦に間に合わなかった悔しさを晴らす新聞でもあった。1年後輩の人たちも新聞づくりに慣れ、それぞれが確実に実力を出してきた。また、途中から入った年長の部員、荏澤・伊藤両名も特集号発行には力が入っていた。野球担当の自分は一人で紙面のプランを作り、入念に練ってから会議に諮った。それなりに説得力もあったのか、ほとんど自分のプラン通りに進めることができた。もちろん、松井編集長も特集号のプランには全面的に賛成した。野球の写真の派手に使って、それまでの地味な新聞からの脱皮を計ろうとしていた。目立つ紙面で大量に売ろうということにはみんな大賛成だった。早慶戦特集号が大量販売できれば「早稲田スポーツ」にとっては、苦勞していた財政問題も解決に向かう可能性があることを期待していた。

1面には、アマチュア野球の神様と言われていた早稲田の飛田穂洲氏の記事を載せること、早慶両校の総長・塾長の記事、両校監督の取材はもちろんだった。有名先輩を集めての座談会、両校のキャプテン（早稲田・徳武定之、慶応・渡海昇二）へのインタビュー、両校の選手紹介など盛りだくさんだった。特に、飛田穂洲さんへの取材は、野球担当の自分にとっては画期的なプランだと自負していた。この飛田取材についてはすでに書いたが安部寮で、野球の神様と言われた人の話を緊張しきって聞いて文章であったのでかなり硬さがあったことは否めない。

特集号の目玉として、大先輩、特に往年の名監督4氏を招いての大座談会を行った。場所は神宮球場の近くにあった学生野球会館の一室を借りた。早稲田側から森茂雄（太洋球団代表）、相田暢一（日本カーバイド社）、慶応側から上野精三（評論家）、阪井盛一（評論家）の4氏に出席してもらった。それぞれ学生時代に選手として、また卒業後は監督として大活躍された人たちだった。特に相田さんは学生の身分で監督を経験された特異な人である。

この座談会では自分が司会をした。大先輩を前に緊張しきって自分が日頃、思っていることが口から出るのだろうか心配していたが、なぜか不安は吹き飛んだ。大先輩の話の中には初めて聞くことも多く面白かった。それぞれの学校の特徴が出ていたこと、学生野球は早慶両校が担ってきたこと、戦後の苦しい時期のことなど実に多くの話を聞くことが

できた。初期の「早稲田スポーツ」の中では、画期的な座談会だったと思っている。

この早慶戦特集号では 1 年後輩の諸君の活躍が目覚しかった。野球大好きな堤哲に加え堀健雄も大奮闘で目を見張った。細かいデータの収集や選手紹介などは、ほとんど彼らがやった。特に、慶応に詳しい堤の取材には大いに助かった。戦特集号の作成を通じて、「早稲田スポーツ」の大半の部員が野球好きだということも分かってきた。編集会議から取材、割付作業に至るまで実に楽しく仕事のできた号だった。

こうして作った早慶戦特集号は、すでに書いたが、1 万部を印刷した。通常の新聞はせいぜい 2,000 部か 3000 部だったから、特集号の 1 万部は大した増刷である。ここで一つ大問題、「新聞の保管場所」であるがすでに別項で書いた通り、中央線信濃町駅前の葬儀社に保管依頼してもらうことで決着がついた。この時代、60 年安保の頃で学生はあまり信用されていなかったのも、この葬儀社の予想外の承諾は大変有難かった。

当時、明治神宮外苑長は野球部出身の伊丹安廣(旧・佐賀中)氏で、神宮野球場長を兼務していた。伊丹さんは早稲田では名捕手として活躍し、卒業後は母校の監督も務めた人である。だが、六大学野球に関する一切の業務は六大学連盟の長船騏郎(旧天理中)事務局長に集中していた。長船氏も早稲田の出身だったが、私たちの「早稲田スポーツ」に対して当初はあまり好意を示さなかった。むしろ創刊間もない新聞に対する正当な評価だったのかもしれない。

1 万部を印刷した「早稲田スポーツ」は、部員総出で横浜の神奈川新聞社から 20 束くらいに纏められた梱包を、分担して中央線の信濃町駅まで運んだ。電車の中でも新聞の 1 束は大きかった。乗客の多くがこちらを見ては変な顔をしていた。帝都典礼社は私たちに預かり料を請求しなかった。私たちは手土産を持って葬儀社に行ったが、金なしの学生に対し同情心があつたのかもしれない。この好意には感謝のしようもなかった。

早慶戦は 2 日か 3 日で終わるだろうとタカをくくっていた。印刷した 1 万部を売り切ることができるか、とかなり心配した。しかし、何のことはない。早慶戦が 6 日間も続いて、まさに六大学野球史上初の激戦となった。元来、慶応が勝ち点を上げれば優勝と決まっていた。それを安藤元博(坂出商高)の活躍で決定戦に持ち込んだのがあった。初戦を勝った早稲田には優勝の芽が出て、球場には初日を上回る大観衆が押しかけた。私たちの新聞は瞬く間に完売。嬉しい誤算、直ぐに神奈川新聞社に電話で増刷を依頼した。これもまた大変で、連日、野球が終わると、横浜・桜木町先の神奈川新聞社行きだった。増刷してもらった新聞を受けとり、信濃町駅前の帝都典礼社まで持ち帰ることだった。全部で何万部を印刷したかははっきりと覚えていないが、少なくとも 5 万か 6 万部、あるいはそれ以上の印刷だったと思う。また刷ってもらった新聞を運ぶため、桜木町と信濃町駅の間を何回往復したことか、恐ろしいことだった。

神宮球場に早慶戦を見に来たほとんどの人が「早稲田スポーツ」を買ってくれた、少なくとも私たちにはそのように思えた。当時、早慶戦特集は、早稲田最大の「早稲田大学新聞」も組んでいた。慶應の三田新聞と連携していたのかもしれない。しかし、実際の売れ

行きは断然私たちが勝っていた。販売のための部員数が足りないことを悔やんだものだ。ただ、厄介な問題もあった。それは「早稲田スポーツ」の部員も早慶戦は見たいに決まっている。特に神宮球場の外側で販売していた部員にとって、試合が見られない悔しさが強かったに違いない。販売担当の責任者は苦労の連続だったようだ。自分は野球担当のため、試合が始まる 15 分ほど前に販売の前線から離れネット裏席へ移動した。野球担当のため試合を見て原稿を書くことが仕事だったからである。何となく、外で一生懸命に「早稲田スポーツ」を売っているほかの部員に申し訳ない気がしてならなかった。

早慶戦が 6 日間も続いて、しかも増刷した新聞も完売。「早稲田スポーツ」には 5、60 万円の現金収入があった。この現金収入はまだ財政状態が安泰でなかった「早稲田スポーツ」にとってはまさに天の恵み、一挙に借金返済ができたばかりか、その後の新聞発行に大きな恵みともなった。6 戦目が終わって早稲田の優勝が決まるとまた大変だった。すでに書いたが、部としても打ち上げをやろうということになって、夜、みんなで金城庵の 2 階へ上った。会費ナシ、食い放題、飲み放題の慰労会兼祝勝会であった。新聞創刊をしてから初めての大大のかつ喜びの慰労会になった。

早慶 6 連戦での早稲田の勝利は、単に早稲田の勝利ばかりでなく、東京六大学野球史上初の快挙でもあった。同時に、私たちの「早稲田スポーツ」をも、厳しい財政難から救ってくれる恵みの神でもあった。早稲田のオーダー、伊田、末次、村瀬、徳武、石黒、野村、村上、所、鈴木、それにピッチャーの安藤、金沢、奥村といった名前は忘れることができない。特に、安藤元博は 6 連戦中 5 戦で完投するという超人的な大活躍をした。右のアンダースローで、魔球の持ち主であった。この安藤が、自分と学年は違うが同い年（学年は 1 年上）だった。早慶 6 連戦の快投もあるが、自分は安部球場で良く会っていたこと、寡黙な彼を「早稲田スポーツ」紙上に囲み記事で書いたこともあって、彼は自分にとって忘れられない存在になった。安藤はプロに行ったが、学生時代のような快刀乱麻の投球ができずに苦闘した。数年後にはサラリーマンに転じ、不幸にして病魔に襲われ他界した。その訃報を新聞で読んだ時、涙がこらえ切れなかった。数日後、築地本願寺で行われた葬儀には自然と足が向いた。

〈部員全員で神宮球場を取り巻き販売〉

早慶戦の販売について、さらに書いてゆく。神宮球場での新聞販売は、もちろん部員全員で行った。その頃、部員がどのくらいいたのかはつきりとは覚えていないが 15～16 人ぐらいではなかったか。事前に打ち合わせ、神宮球場を取り巻くように販売の部員を配置した。確か、二人 1 組となって販売活動をした。販売責任者は山崎だった。信濃町駅前の「帝都典礼社」の倉庫に預けてあった「早稲田スポーツ」早慶戦特集号は、朝の早いうちに神宮球場の一角に持ってきて、販売責任者が管理していた。

現在（平成 20 年代）も神宮球場の正面近くに「早稲田スポーツ」を販売する数人が一団となった部員の姿をよく見る。ただし、半世紀前の部員数では塊になって新聞を売る方

式はとれなかった。部員の数が当時と現在とでは雲泥の差があり、とてもではないが集団になって「早稲田スポーツ」を販売する方式はとれなかった。その上、自分は野球の担当、野球を見なければ記事が書けない。それにスタンド、特にネット裏の記者席には早稲田のOBばかりではなく、学生野球の著名人が陣取っていた。「早稲田スポーツ」としては、そうした著名人の中から何人かを選んで取材する必要があった。何しろ、試合開始 20 分前までは特集号の販売のために球場の外側にいた身である。急ぎ取材記者に変身するのだった。取材も野球担当の自分にとっては本業だ。そこで会った宮崎、北崎さんといった野球部の大先輩には短時間だが、いろいろな話を聞くことができた。結局、早慶 6 連戦中は毎日、神宮球場の内と外で同じようなパターンで過ごしていたのだった。

野球担当の自分にとっては、神宮球場のネット裏はいわば仕事場、いつも緊張の連続であった。その頃になると、ネット裏にはかなりの顔見知りの人がいた。各新聞社、それもスポーツ新聞ばかりでなく一般紙の人もいる。さらに、当時は民放も学生野球を放送していた。特に、早慶戦ともなれば、何局かは実況放送を行っていた。そうした中で、知り合いになった人に、毎日新聞の末吉俊信、日本テレビの赤木孝男の両氏がいた。さらにネット裏の中央には早稲田の野球部の大先輩が多くいた。この年の「早稲田スポーツ」早慶戦特集号で、大変な協力を頂いた早稲田の森茂雄、相田暢一、慶応の上野精三、阪井盛一氏などの顔は良く見かけたものだ。さらに戦前の早稲田の大先輩、早慶戦で大活躍をした名投手・小川正太郎（旧和歌山中）氏などもいた。小川さんも「早稲田スポーツ」を良く読んでもらっていた関係で、時折、ネット裏の席で、昔の早稲田野球の話を聞いたものだった。

〈野球部同期、鈴木恵夫の大三塁打(第4戦)〉

早慶 6 連戦は、昭和 35（1960）年秋のリーグ戦の早慶戦で、早稲田が勝ち勝ち点を挙げたことから始まった。リーグ戦の状況は早稲田が劣勢だったがひっくり返したのである。延長、日没引き分けを挟んで決定戦まで進み 6 戦目を早稲田が勝ち取ったものだった。この 6 日間は、一人の早稲田野球のファンとしてみても血沸き肉躍る熱戦ばかりであった。特に、3 年生投手・安藤元博の驚異的な熱投が光り、短絡的に考えれば 6 連戦は安藤一人で勝ったような感もあった。

私たちの同級生、鈴木恵夫捕手（静岡・清水東）が、優勝決定第 1 戦となる 4 試合目に大殊勲を挙げた。終盤、石井連蔵監督が迷わずピンチヒッターとして鈴木恵夫を起用。2 年生の大型キャッチャーである。キャッチャーには名手・野村徹がいたため、鈴木はなかなか出場機会がなかった。鈴木は絶体絶命の時、早稲田の期待を一身に背負ってバッテリーボックスに立った。鈴木心が揺れていないことは素振りで分かった。長身の鈴木はいつも通りの落ち着いた素振りを何回も行ってバッテリーボックスに入った。ただ、自分の気持ちの中には、早稲田の敗戦濃厚という意識が強かった。何しろ、自分がいる場所は完全に慶應側ベンチの上。早稲田の敗戦濃厚と思い、わざわざ 1 塁側から 3 塁側までネット裏を

移動したのである。こういう景色を見るのは神宮の試合を多く見ている身だったが初めてだった。同期・鈴木のバットに祈るばかりだった。三塁側の目の前のスタンドは慶応の内野席、すぐ隣は慶応の学生席、いずれにしても敵陣深く乗り込んでしまったことになる。慶応内野席には当然というか女性が多い。しかも中年の婦人が多く、若い学生に負けじと大声援を送っている。慶應側で早慶戦を見るのは初めてだった。それも負け試合になりそうな場面だった。この時の気持ちは何とも言えない悔しさで一杯だった。肩からぶら下げたカメラは慶応の席に向けたままである。

鈴木バットが大きく振られ、ボールは一瞬消えたかのように見えなくなった。右中間深々と破っているではないか。その時、自分では何をどう言ったのかも分らない。いずれにしても「バンザイ！」と叫んだことだけは覚えている。カメラは手から離れてブラブラしたまま、もちろん両手は天に向けて挙げたまま。突然、目の前の女性の金切声が聞こえた。「そこの学生何よ！ どきなさい！」と、怒っている声でハッと気が付いたほどだ。自分は敵陣で鈴木恵夫の3塁打に興奮していたのだ。目の前の人たちは自分が早稲田の人間と気付いて怒鳴っていたのだ。早稲田は次打者石黒もヒットを打って同点とし、この試合を日没引き分けにお持ち込んだ。この頃、神宮球場にまだナイター設備がなく日没になると引き分けになった。

9回表まで慶應は角谷投手の好投で、1対0とリードしていただけに鈴木の一打は悔しさ倍増の決定的だった。早稲田にとっては絶体絶命のピンチを覆す一打であった。慶応の観衆は誰もが勝利を確信していただけに無念だったに違いない。鈴木は右中間を破る3塁打、次の石黒行彦（宮城・仙台一高）が鈴木を返す。これで慶応の勝ちをもぎ取り、優勝寸前の慶應を絶望の淵へ追い込んだ。鈴木は、4年生で主将になり大型捕手として野球部をまとめた。後にプロ野球（東映）へ進んだが、学生時代ほどの活躍はできなかった。

何と言っても、安藤元博の好投が早稲田優勝の最大の原動力であった。安部球場で会う安藤は極めて口数の少ない真面目な学生だった。こちらが質問をしても余計なことは言わず、聞かれたことしか応えなかった。歳が同じだっただけに、もう少し砕けても良いのにと心の中では思っていた。最上級生に金沢宏（岩国高）や奥村（岐阜高）といった好投手がいたことから安藤は翌年のエースとされていた。早慶戦特集号の取材で安部球場や安部寮までを歩く道のりで話をしたが、あまり落ち着いているのでこれで自分と同年なのかと不思議に思っていた。すでに安藤は4年生の風格十分だった。

安藤投手は6試合のうち、5試合に完投し、早慶6連戦を背負って立ったのである。安部球場で会っても安部寮で会っても安藤は静かな男だった。一面、何を考えているかが分からない所もあった。石井連蔵監督の選手管理の厳しさが原因で自然と静かになったのか、天性の静かな男なのかは分からない。もっとも、早稲田の選手は静かな男が多かった。安部球場でも安部寮でも誰一人賑やかな振る舞いをする者はいなかった。早稲田野球部の伝統かと思ったものだ。従って、6連戦が終わり、早稲田が歴史的な勝利を手にしてからも安藤に対する不思議感が強くなった。安藤のどこに、あのような長い戦いを勝ち抜く力と闘

志が潜んでいたのか、という思いに駆られたものである。

早慶両校の練習を取材した時に感じた両校の違いは大きかった。しかも両校の練習方法や雰囲気は全く逆で、監督と口を利くこともできないほど厳しかった早稲田が勝ち、監督と選手が和やかに一緒になって煙草を吸っていた慶應が負けた。何か、勝負に対する執念というか根性が違っていたように思えてならない。

最後の試合となる早慶 6 戦目の後半、自分はネット裏にいた。ちょうど、外苑長の伊丹安廣（旧佐賀中）さんをネット裏最上段の特別室に見つけ駆け上がって行った。まだ、試合は終わらないと勝手に思っていたのである。ネット裏の特別室へ行くには階段を数十段も登らなければ行けなかった。伊丹さんに昔の学生野球の話を聞きたいと思っていた。伊丹さんは戦前の六大学野球の歴史に名が残る名捕手、早稲田の監督も経験した人で、かねがね話を聞きたいと思っていた人である。すでに何回か会っていたが、野球の話は球場長の部屋で聞くよりもスタンドの方が良いと思ったからである。ちょうど話が戦前の佳境に入ったところで、試合は早稲田が勝って終了した。こちらは慌てて慌てた。自分は野球担当のためカメラ持参で試合を見ていた。優勝が決まれば当然、優勝の瞬間をカメラに納めなければならない。ネット裏最上段に来る前は、優勝が決まれば、グラウンドに降りて写真を撮る予定にしていた。早稲田優勝で、石井連蔵監督の胴上げがある。スタンドの上段の特別室からグラウンドまではかなり遠い。満員のネット裏は普通の時でも早くは降りられない。まして優勝が決まると観客は大騒ぎ。静かなネット裏席は一変する。移動も始まる。急いでグラウンドに向かったが、すべては後の祭り。やっと、神宮球場のグラウンドに降りた時には、監督の胴上げは終わっていた。優勝の興奮に湧いているネット裏の通路は身動きができない。カメラ持参で見ていた自分は任務の写真を撮ることができない。地団太を踏んだが、どうしようもなかった。野球担当としては失格であった。優勝の瞬間と石井監督の胴上げが必要だった。もう少し、早く機転を利かしグラウンド近くに移動していればよかったと悔やむことしきりだった。

次号の「早稲田スポーツ」には、早慶戦の結果を載せるために、写真が絶対に必要だった。監督胴上げが絶対に必要だった。しかし、自分は優勝の瞬間の写真はもちろん、監督の胴上げ写真も撮れなかった。慌てたがどうしようもなく、急いで善後策を考えなければならない。焦りばかりが募った。学校に出て、写真部の友人・今井隆一（早稲田高）に事情を話してやっと早慶 6 連戦の写真を写真部の人から借りることができた。この時、快く写真を貸してくれたのが写真部幹部の栗原達男氏だった。栗原さんは、卒業後、朝日新聞社に入り写真部で活躍し、後に独立して社会派カメラマンとして磨きをかけ大活躍をした。特に、各種スポーツ写真が得意な人である。

＜6連戦の勝利は厳しい練習のたまもの＞

秋のリーグ戦最終週の早慶戦は 3 回戦まで行われ、早稲田が 2 勝 1 敗で勝ち点を取った。当時、神宮野球場にはナイター設備がなく、日没になると同点なら引き分けとなる。この

年、慶応の戦力は充実していてやや有利との前評判だった。昔から「早慶戦は弱い方が勝つ」とも言われていた。連日の猛練習を見ている人間には、このジンクスは全く野球部の選手を馬鹿にしていた。自分もこうした言い方をされると不愉快になった。早稲田は勝つための猛練習をやっていたからである。

ただ、お互い学生がやる野球、それほど実力に差があるわけではない。その日の調子に大きく左右されかねない。両校必死でやって来た練習の成果が、当日どれほど出せるか出せないかが勝敗を決するのだと思っていた。早稲田のバッテリーは、投手・金沢宏(岩国高)、捕手・野村徹(北野高)、共に4年生である。このバッテリーはシーズンを通して安定していた。そこへ3年生の投手、香川・坂出商出身の安藤元博が頭角を現してきていた。安藤は寡黙な男で、インタビューしても、こちらから質問しない限り言葉を発しなかった。最初はこの人は何を考えているんだと、怪訝にさえ思ったものである。その後、親しくなっていた同じ四国の土佐高から来た公文博孝と付き合うようになって、謎が解けた。「安藤さんは真面目な人で余計なことは喋らないよ」とか「あれで、自分の投球術を確実に心得ていて、信頼できる人だ」と言われ、無駄口を叩かない安藤に好感を持つようになった。安藤は右投げアンダースローからのシュートが得意ボールだった。地面を這うように投げる変化球は打者にとってはかなり打ちにくいに違いない。静かな男の投球は時には魔球となつて打者の胸元へ唸っていった。

早慶戦が始まる前にも安藤に話を聞いたことがある。「安部球場」から歩いて安部寮へ帰る道々での話だった。わずか10分間ほどのインタビューであった。安藤は3年生だったが、すでにエースの風格を持っていた。話の端々に自信が漲っていた。「自分のピッチングをすれば必ず勝てる」と少ない言葉の中に強い意欲が読み取れる話をした。自分と同年でも3年生の安藤元博が堂々と話す言葉には早稲田を背負っているという気迫があった。

石井監督も安藤の安定さを強く信じていた。緒戦の先発は安藤だった。安定した投球でまず勝利を得た。2回戦は上級生の金沢宏が先発、調子が出ないまま慶応に破れた。次の3回戦を早稲田は絶対に勝たなければならない。優勝を目指すには、勝ち点が絶対条件である。早慶戦に勝ってリーグ優勝決定戦に持ち込まなければならない。

3回戦。早稲田は必勝を期して安藤を先発させた。安藤は快調だった。安打は許すものの点を与えない。この安藤の快投に徳武定之主将を先頭に選手全員が奮い立った。特に徳武のファイトは6万の大観客をうならせた。徳武ののっしのっしと歩く姿だけでも威圧感がある。その徳武が快足を見せた。9回、野村徹の平凡なショートゴロの間に本塁を突いたのだ。この会心のスライディングに慶応の捕手大橋(土佐高)は本盗を防げず、早稲田は3点目を上げ勝利を決定づけた。安藤は完封で勝った。選手それぞれには、安部球場で石井連蔵に血を吐くほど猛烈に鍛えられた裏づけがあったのだ。早稲田の勝利は練習の賜物だといっても過言ではない。同時にこの3回戦に勝利した時点で、安藤元博伝説が始まるのである。早稲田は3回戦に勝ったことで、俄然プレーに自信が漲り、全員に浚刺としたプレーが見られた。石井監督は連日、安藤を先発起用した。安藤もこれに応え、大奮闘

だった。

4回戦、5回戦は慶応のピッチャー角谷、清沢相手に孤軍奮闘、引き分けた。4回戦（優勝決定戦第1戦）の早稲田は苦境に立つ。早稲田は点が取れずに9回まで来た。それからがまるで夢のような出来事が早稲田に起こった。このこともすでに書いたが続ける。試合は1対0で慶応が勝ったまま9回2死になっていた。早稲田の誰もが敗戦を意識していたと思う。自分はネット裏席で7回頃から落ち着かなくなった。3塁側の声援が一層大きくなっていた。野球担当としてはいても立ってもいられない心境であった。自然に身体が動き1塁側から3塁側のスタンドに移った。なぜ移ったかといえば、3塁側のスタンドの最前列で慶応側の紙吹雪をカメラに収めようと考えたのだ。身体が自然に動いたのである。ちょうど、ベンチの上あたりに着き、カメラを一般席から学生席に向けた。なかなか良いアングルであった。このことは先にも書いた通り、鈴木恵夫の活躍で慶応の勝ちをもぎ取り引き分けとなった。

6回戦が運命の決戦。安藤の身体はすでに限界を超えてバラバラ、あとは気力のみで投げた、と後に語ってくれた。早稲田は安藤一人。慶応は先発角谷（宇治山田高）、続いて清沢（岐阜商高）、三浦（秋田商高）、丹羽（北野高）と強力な4投手がいた。慶応も優勝に手がかかっていただけにここで絶対に負けるわけにはゆかない。日本で野球を始めた最初の学校の一つという自負もある。結局、怪腕安藤が慶応を3対1で退けて優勝した。「筆舌に尽くしがたい」という言葉は、この早慶6連戦における安藤の快投に対してのみ言えるものだった。

第6戦で勝利を得た時、自分はネット裏の最上段にある特別室の前にいたことはすでに書いた。これは大チョンボである。野球担当として優勝の瞬間も見ず写、真も撮れなかったとは、何とも言い訳ができなかった。要人と話をしていたとはいえ、少し油断していたのが失敗の原因であった。

〈両校練習の違いが意味すること〉

しばらく経って、再び早慶6連戦を振り返ってみた。緊張感が途切れることがなかった昭和35年秋の早慶戦は早慶の学生のみならず一般人まで巻き込む熱戦を展開した。自分は「早稲田スポーツ」の野球担当として、事前に両校の練習風景を見る機会を得た。その中で見た両校の練習の違いに大ショックを受けたものだ。早稲田の安部球場では死に物狂いの徹底したスパルタ式の練習の姿を見た。石井連蔵監督と徳武定之に代表される選手たちの間には、一切の妥協を許さない指導者の一方的な姿があった。選手と監督との間にはかなり厚い壁が存在した。選手の側から進んで和やかな言葉を発する光景はついぞ見ることがなかった。ここには、学生たちの主義主張は許されない独特な精神野球が根底にあるような気がした。監督を中心にして選手たちが議論をする姿は全くない。この練習方法が早稲田独特の精神野球なのか、と訝しく思うことしきりであった。

一方、日吉の慶応グラウンドでの練習では、極めて合理的な考えの中に理詰めの練習があ

った。従って、監督と選手たちとの間には和やかな話し合いがあった。これぞ、現代に生きる学生スポーツの典型を見た気がする。練習中、選手たちは互いに声を出しあい、気合を入れていたが、その声には余裕さえ感じられた。かといって、慶應の練習が実のないものかと言えば違う。極めて合理的でゆとりのある練習を真剣にこなす選手たちだった。ゆとりの典型は練習後の監督と選手たちとの間に、目を疑うような姿を見た。両者はグラウンドを出た所で、煙草を吸い出したのである。監督も選手を一人の人間として見ている姿であった。話に聞いてはいたが、慶應の練習は実に和やかなものであった。練習のゆとりを試合の本番に一転、緊張感漲る形に変形するバランスの妙が慶應の強みなのかもしれない。つまり、早慶戦を前にした両校の練習の中に両極端の姿を見たのである。

6連戦が終わってみると、極端に妥協を許さない厳しい練習を課してきた早稲田が勝った。合理的な練習を重ね、選手たちの自主性をも尊重してきた慶應が負けた。早稲田の人間としては、当然、母校の勝利は嬉しいに違いないが、何とも言えない複雑な心境にならざるを得ない。近代野球としての早慶戦を考えた時、この勝利が意味するものは一体何だろうか。今後、早稲田野球の大転換が求められるのではないかと正直に思ったものだ。

早稲田野球には偉大な先輩、飛田穂洲氏の「一球入魂」の精神が徹底されている。早慶6連戦の時代、飛田氏は健在で毎週、郷里の水戸から上京し安部寮に泊まっていた。野球部の選手たちに徹底した飛田野球が叩き込まれたのは当然だろう。石井連蔵監督は飛田穂洲（本名・忠順）の水戸の後輩であり飛田氏存命中の6連戦時には飛田野球の完成時にあったのかもしれない。石井監督は飛田野球の実現を図るために選手たちを徹底的に鍛えあげている最中で、安部球場での練習にも全く手を抜くことをしなかったのである。

＜「早慶6連戦」のスコア概略＞

六大学野球史上初の早稲田対慶應の6連戦の結果は以下の通り。

【昭和35年秋 早慶六連戦】11月6日～12日 於 明治神宮野球場

・リーグ戦1回戦（11月6日）

2—1 早稲田 勝利投手：安藤元博

試合時間：2時間28分

【早稲田オーダー】伊田、末次、村瀬、徳武、石黒、野村、村上（好田）、所、安藤

・同 2回戦（11月7日）

1—4 慶應 勝利投手：角谷隆（敗戦投手：金沢宏）

試合時間：2時間40分

【早稲田オーダー】伊田、末次、村瀬、徳武、石黒、野村、村上（好田）、所、金沢

Ph 大井、Ph 奥村、PR 前田

・同 3 回戦 (11 月 8 日)

3—0 早稲田 (勝ち点 4 とする)

勝利投手：安藤元博(敗戦投手:清沢忠彦)

試合時間：2 時間 36 分

【早稲田オーダー】伊田(鈴木勝)、末次、石黒、徳武、村瀬、野村、村上、所、安藤

(注) 両校ともに 9 勝 4 敗・勝ち点 4 と並ぶ。

・優勝決定戦第 1 戦(11 月 9 日)

1—1 日没引き分け

試合時間：2 時間 44 分

【早稲田オーダー】伊田(鈴木勝)、末次、(角田)、石黒、徳武、村瀬、野村、好田

(村上)、所、安藤 Ph 鈴木恵、Ph 大井、PR 前田

・全上 第 2 戦 (11 月 11 日)

0—0 日没引き分け

試合時間:3 時間 8 分

【早稲田オーダー】伊田、末次、石黒、徳武、村瀬、野村、所、村上(好田)、安藤

Ph 鈴木恵、Ph 鈴木勝、PR 前田

・全上 第 3 戦 (11 月 12 日)

3—1 早稲田(早稲田 3 季ぶり 20 回目の優勝)

勝利投手：安藤元博(敗戦投手は角谷隆)

試合時間：1 時間 40 分

【早稲田オーダー】伊田、末次、石黒、徳武、村瀬、野村、所(鈴木勝)、村上(好田)

安藤 Ph 前田

(参考:「早稲田スポーツ」、「早稲田スポーツ年鑑」、ウイキペディアなど)

〈早慶6連戦は「早稲田スポーツ」にとっても救いの神〉

正確な記録が残っていないが、松井盈と自分の頭には「10 万部は売ったよな」というのが共通した認識であった。正確に 10 万部に届かなかったにせよ、気持ちの上では 10 万部も売った気分であったことは間違いない。まさに、早慶 6 連戦は「早稲田スポーツ」にとっても救いの神であった。

2 年目を迎えていた「早稲田スポーツ」も早慶 6 連戦前までは、相変らずの財政難で資金繰りに躍りとなっていた。構内で机を出し小さな看板に文字を書いて新聞販売に勢を出す

ものの、なかなか売れなかった。隣の学生運動の立て看の大きな特徴ある角文字が目立って、私たちの文字は迫力がなく目立たないので、通る学生も振り返えようとはしなかった。時折、通るクラスメートも「ご苦労なことね」と半ば冷やかすような言葉をかけて過ぎてゆく。声をかけて行く人は女性が多かった。私たちは教育学部・国語国文学科でクラスの半数近くは女性だった。「早稲田スポーツ」の広告収入が思うように取れない中では、構内販売も馬鹿にできない収入源である。部員の中には「恥ずかしいから構内販売は嫌だ」と部員らしからぬことを言う者がいたのは、何とも言えず残念だった。当時、60 年安保闘争の最中で、普段学生運動に興味を持っていない学生までもデモに参加したりしていた。学生の誰もが「安保反対」を連呼しているような時期だった。私たち「早稲田スポーツ」の部員は広告収入が不足している中で、とてもデモに参加している余裕はなかった。時間があれば一刻でも広告活動に出向くしかなかったのだ。「デモより新聞」という考えが松井と自分の中では全く一致した。従って、学生運動の派閥も運動が何をするのかも全く分からないままに過ごしたものである。

37 神宮球場で会った早稲田出身の紳士たち

—小川正太郎、伊丹安廣、末吉俊信、赤木孝男さんら—

〈神宮ネット裏で会った多くの早稲田野球人たち〉

「早稲田スポーツ」の創刊当初から、自分は野球部の担当になり 4 年生になる前に後輩の堤哲に引き継いだ。実質 2 年半くらいの担当だった。その間、早稲田の試合があるたびに神宮球場に通った。創刊時から野球部マネジャーの黒須陸男さんにネット裏の新聞記者席に入れてもらったことが幸いだった。神宮球場のネット裏には多くのマスコミ人がいた。なかでも早稲田出身者が多いことが特徴だった。また、ネット裏の観客席にも多くの野球部 OB が観戦に来ていた。言ってみれば神宮球場のネット裏席は早稲田野球部の OB 会場の様相を呈していた。

ここでは神宮球場で会った人たちの中から、とくに思い出深い人たちのことをランダムに書いてみる。

本格的な「早稲田スポーツ」の取材が始まったのは、昭和 34 (1959) 年の夏休みに入る頃だった。それまで、松井を中心に新聞発刊を決め、体育局との折衝、学生の会の届け出、部員募集、金策問題など課題が目白押しだった。それが理由で、肝心の原稿を書くための取材をどうするかについては、手が回らなかった。まさに新聞制作者としては本末転倒だった。それでも夏休みに入る頃に一応の取材体制ができてきた。当時、早稲田には体育局所属の運動部が応援部を含めて 39 部あった。「早稲田スポーツ」の創刊期の部員はたった 6 人、単純に考えても一人が受け持つ担当運動部数はかなり多くなる。一人で 6 部か 7 部が普通だった。自分が持つ担当部の一つが野球部であった。念願が叶って担当になった野球部の取材には力が入った。

当時、大学のキャンパス北西部にあった理工学部の横を抜け、大通りを渡った先に安部

球場があった。早稲田通りを高田馬場方面から来ると、ちょうど、グラウンド坂上と言われていた場所を左折して新目白通りに下る坂の途中である。道路が下った新目白通りには都電の早稲田駅が。安部球場の周囲は高い金網状の塀が巡らされ、古いスタンドもあって、中のグラウンドは完全に遮断されていて見えない。ノックの心地よい音と選手たちの大きな掛け声ばかりが外へ漏れてくる。何にも知らない人は、大学のすぐそばになにがあるのだろう、と訝しげに思うに違いない。道路沿いのコンクリートの切れ目のような所に入口があった。その門を入って、土のグラウンドと練習に励む多くの選手たちを見て納得だった。入口は、ちょうどホームベースに近い所にあり、目の前に広がる選手たちの光景には目を見張るものがあった。この小さな門は当然、練習を見に来る観客も通る通路である。早稲田野球部の練習場がキャンパスとこれほど近い所にあるとは思ってもいなかった。

「早稲田スポーツ」の野球の取材といっても、最初はただ、安部球場の練習を見ているだけだった。とにかく、監督のことも知らないし、ましてや選手一人一人のことも知らなかった。実際に監督や選手に会って質問ができるようになるのは、しばらく後からである。ここに書いたことは、安部球場に初めて入った時の印象にしか過ぎない。野球部の記事を本格的に書きだしたのは、別項に書いた通り、野球部マネジャー黒須陸男さんの骨折りで神宮球場のネット裏席に入った後のことである。

〈学生野球を放送していたNTV赤木孝男さん〉

昭和 30 年代初期は、テレビ放送が始まってまだ間もない頃であった。それまでの大学野球は NHK ラジオで放送しているくらいで、しかも、早慶戦のみが放送されていただけだったようだ。テレビが普及してくると、NHK のほか民放までが参入して来た。特に日本テレビが六大学野球を実況中継していたのが目立っていた。ネット裏の記者席には新聞の他にラジオ、テレビの記者やアナウンサーも大勢いた。

野球部のサブマネの駒井さんが最初に紹介してくれた人が日本テレビアナウンサー赤木孝男(早大学院高)さんだった。赤木さんは、「早稲田スポーツ」という新聞名を聞いても、ピンとこない様子だった。「大学新聞ではないですね」と丁寧な質問が出た。こちらが、まだ誕生したばかりの学内のスポーツ専門の新聞だと分かったら、真剣な顔になり、いろいろと質問をしてきた。これまでの経緯を細かく説明をした。赤木さんは納得した様子だった。変化の兆しは説明後の赤木さんの態度に出た。ネット裏席の実情や記者席のこと、早稲田野球部のこと、他の新聞社、テレビ局のことまで説明してくれた。この出会いから、実は赤木さんとは、途中の転勤を挟んで、約半世紀にわたる付き合いが始まった。記者席には試合中、じっと動かずに 1 点を見つめるように試合を見ている人もいれば、試合などまるでお構いなしで机上でせっせと文章を書いている人、野球には関心がないかのように何も書かずに煙草ばかりふかしている人など、さまざまな人がいた。

赤木孝男さんは生粋の早稲田人だった。放送研究会を経て、日本テレビに入り、主に野球の実況中継を担当していた。プロ野球の実況のほか六大学野球の放送も担当していた。気

さくな性格もあって、赤木さんは早稲田の野球部の人たちからはかなり信頼されていた。野球部のマネジャーはもちろん、現役のレギュラーたちも野球のことだけではなく、そのほかのことも含め何かと相談に乗ってもらった、と後年、同期の公文博孝（高知・土佐高）から聞いた。

赤木さんとの付き合いの中では面白いこともあった。すでに 50 歳を少し越えた頃、自分は福岡に赴任していた。突然、東京の赤木さんから電話があって、「仕事で福岡に行くので会いたい」とのこと。単身赴任中の身には東京からの来客は大歓迎だ。すぐに、会社近くの鮮魚料理店を予約した。会社近くにあった評判の福岡の鮮魚を食べてもらいたいと思っていた。約束の日、早めに店に行き待ちっていると、赤木さんは一人の紳士を同伴していた。

この人が何と、自分が福岡に来て間もない頃、パーティで卒業後初めて会った東芝の岩本光弘（神奈川・湘南高）さんだった。岩本さんは例の「早慶 6 連戦」の時に 4 年生で、3 塁コーチや新人監督などをしていた人である。6 連戦の表彰式では何かのカップを受けている。「早稲田スポーツ」にも 6 連戦後の結果を 1 面に載せた。その時の優勝写真の中に優勝カップなどを持った 5 人の選手が写っている。岩本さんもその中の一人である。卒業後は東芝に就職し野球もやった。その後、東芝の指導者になった。しかし、現役時代の岩本さんとは個人的な付き合いはなく、卒業後の社会人野球での活躍も新聞で見ただけで知っていたくらいだった。それが、福岡に赴任して間もない頃、東芝が開いた大パーティで、偶然岩本さんに会った。福岡に赴任する前に、東芝とは新規事業開発のためのあるプロジェクトチームを立ち上げていた。双方からメンバーを数人出し、事務所を浜松町の東芝ビル内に置いた。自分はそのチームの責任者として 2 日に 1 度の割合で東芝ビルに通った。6 階だったか 7 階にプロジェクトチームの部屋があり、自分の席もそこにあった。プロジェクトチームの東芝側の責任者は常務だった。多分、その関係で福岡に赴任していた自分宛に東芝の大パーティへの招待が来たと思われる。

当然、岩本さんの顔は知っていたので、パーティの席上何十年ぶりかで会ったことになる。話をすればたちまち、早慶 6 連戦のことになる。まさに意気投合した時間だった。岩本さんは東芝の関連子会社の責任者として、自分よりも早く福岡に赴任していた。

自分が予約した店に来るまでに、岩本さんは赤木さんに二人の関係を簡単に話したと言っていた。赤木さんは「うーん、そうか、不思議な縁もあるものだ」と感心していた。もっとも、赤木さんは福岡に来るまで私たち二人の関係は知る由もなく、学生時代から良く知っていた後輩（自分にとっては先輩）を自分に紹介しようというのが会う目的だったという。会えば 3 人はたちまち意気投合し、福岡の鮮魚をたらふく食べた。

その後、赤木さんや岩本さんと会う時の定番は「6 連戦の話」だった。3 人の会話は自分が東京に戻ってから続いた。食事をしながら旧交を温めていたのである。場所は自分が勤めていた会社近くの本郷の天麩羅屋が多かった。その後、会社を辞めてからも、神宮のネット裏で赤木、岩本両氏にはたびたび会った。

＜早大エースからプロを経てマスコミ人となった末吉俊信さん＞

末吉俊信（旧小倉中）さんも忘れがたい一人である。末吉さんを紹介してくれたのも黒須陸男さんだった。末吉さんは昭和 20 年代を代表する早稲田の大投手である。大学に入る前、九州・小倉中学（旧制）のエースとして活躍、後に海軍航空隊に入隊したが、戦後、八幡製鉄を経て早稲田大学に入学した。大学時代に通算 44 勝をマークしたが、この記録は長い間破られずにいた。昭和 27（1952）年、毎日オリオンズへ入団し、その年のオールスターにも出場した。後に毎日新聞記者（運動部）を経て実業界へ転じた。

末吉さんの数年後に旧制小倉中学で活躍し、早稲田に入った人に福島一雄さんがいる。末吉さんは軍隊に入ったが、福島さんは旧制小倉中から新制の小倉高校に入って中等学校（高校）野球で大活躍をした人である。年次は違うが二人とも早稲田に入り神宮で大活躍をした。二人揃って神宮の星であったが、生年は末吉さんが 4 歳くらい年長だった。末吉さんは軍隊生活を経験し、八幡製鉄に入ったため、末吉さんには甲子園経験がない。いきなり早稲田入学だったらしい。末吉さんは自分とは干支でちょうど一回り違うため、神宮で会った時の末吉さんは 32、3 歳頃だった。すでにプロ野球をやめて、毎日新聞（運動部）で健筆をふるっていた。

末吉さんはプロ野球経験者にしては割合小柄で、どこに六大学リーグで通算 44 勝もした力があるのか分からなかった。上背も 180 ㌢もある人ではなく、いわゆる普通の背丈の人だった。何と言っても、末吉さんは伝説のピッチャーだった。もちろん、現役時代の姿は見たこともなく、すべては新聞記事によるものだ。小柄な体格から投げ込むカーブやシュートに威力があり、ミラクル投手と言われ、学生にはなかなか打てなかったようだ。末吉さんも真面目な人で、話す言葉一つ一つに重みがあった。しかも丁寧な話をした。後輩だからといって、ぞんざいな話し方はしなかった。一語一語噛み砕いて話す言葉には説得力があった。早稲田の試合がある日はいつも決まった時間に神宮に現われ、あっという間に姿を消す人だった。従って、何か聞くことがある場合、試合が終わってからではダメだった。話を聞くのは試合の合間に限った。昭和 20 年代の学生野球のことは生き字引のように詳しかった。昭和 20 年代半ばに早稲田のエースとして獅子奮迅の活躍をした人にしか知り得ない情報も持っていた。特に早稲田野球の歴史の中でも終戦直後の話は詳しかった。その中に、時折、飛田穂洲さんの話も出た。やはり早慶戦の話になると目が輝いてきた。神宮球場で何回も会ううち末吉さんには何でも聞くことが出来るようになった。有楽町の毎日新聞社にも何回も通った。そんな時の話は野球のことばかりではなく、社会全般に亘っていた。毎日新聞社の近くにあった「富士アイス」というカフェでご馳走になりながら話を聞くことが多かった。

＜戦前の大投手・小川正太郎さんを知る＞

末吉俊信さんから、早稲田野球の大先輩を紹介された。戦前の早稲田野球部の伝説的大投手小川正太郎氏である。旧制和歌山中学から早稲田に入学、早慶戦では小川・宮武の

対決として語り草になっている。末吉さんにすれば、大学だけではなくピッチャーとしても大先輩だった。当時、小川さんは日本社会人野球協会の専務理事をしていた。毎試合、神宮に現れたわけではなく、時たまネット裏の特別室に座っていた。ある時、末吉さんから、「野球担当なら会っておいた方が良い」と言われ、ネット裏の高い場所にある特別室まで行って紹介してもらった。ずっと背が高い人で、特別室の中央の椅子に座っていた。一般のスタンドからはまるで見上げるような場所である。当時はすでに50代の半ば頃になっていたのだろうか。小川さんは社会人野球界では長老格の存在だった。話してみると気さくな人で、「有楽町の毎日新聞ビルにいますので暇な時に来なさい」とも言ってくれた。これは末吉さんが同伴してくれたお蔭の社交辞令かと思った。そのことを末吉さんに言うと「そんなことはない、一度小川さんの所に顔を出した方が良い」と助言をもらった。

日を置いて（多分3年生の春だったか）、有楽町の毎日新聞運動部に末吉さんを訪ねた。その足で別フロアにあった小川さんの事務所「社会人野球協会」も訪ねた。受付で小川さんへの取次ぎを依頼した。小川さんは専用の部屋の大きな机の前に座っていた。やや、気分が高揚していたが、気を落ち着かせてから「早稲田スポーツ」創刊の趣旨を説明し、時機を見て原稿をお願いしたいと、ちゃっかりと自分の任務も果たした。小川さんの原稿は昭和36年11月の「早慶戦特集号」の1面に「大切な気迫と闘魂」として実現した。早慶戦を気迫ある学生野球の最高の試合にしてほしいとの願いが込められている文章だった。署名は活字ではなく小川さんが書いたペン字を凸版にして使った。前年（昭和35年11月）の「早慶戦特集号」の1面の飛田穂洲さんの筆文字とは対比する感じであった。

それからしばらく経って、神宮球場ネット裏で小川さんと話をしていた時、突然、「新聞社に行かないか」と言われた。野球部の先輩から声をかけられ、一瞬とまどった。すぐに就職の話だと分かった。「都合のよい時にボクの事務所へ来なさい」と言う。新聞社という言葉に魅力を感じ、小川さんの事務所に行ってみようという気になった。その後、小川さんに電話をして、小川さんの事務所へ行った。「スポーツニッポンなら何とか口を利いてやれる」というので、頭が混乱した。小川さんに就職の話をした記憶はなく、なぜ、スポーツニッポンの話がでるのか分からなかった。あっけにとられていたが、要するにスポーツニッポン新聞に就職の世話をする、ということだった。何でも、小川さんの昵懇の人（先輩）がスポニチの社長をしているという。小川さんは「彼は社にいるはずだから、直ぐに挨拶に行ったらどうか」と言う。その足で、フロアが違うスポーツニッポン新聞社へ行った。社長は宮本さんという人で元々は毎日新聞社の人だという。毎日新聞は大手三大新聞の一つで勢力を誇っていた。スポーツニッポンは毎日新聞の傘下であり、幹部は毎日新聞から派遣されているようだった。ただ、スポニチへの就職の気持ちが固まらない段階で宮本社長に会うことが良いことか否かは即断できなかった。焦りの気持ちがなかったと言えば嘘になる。しかし、先輩の好意を無碍にも出来ず、優柔不断なまま自分は宮本さんに会った。かなり戸惑った印象を残してきたと思う。このことが、後々、自分で自分を苦しめる結果になった。結果としてはスポニチへの就職を断り、小川さんにも丁寧に挨拶に行った。

その後、自分の意志で受けた毎日新聞社の試験に落ち、全くマスコミとは縁のない業界に就職する結果になった。しかし、小川さんはその後、スポニチ問題には一切触れず、ただ「頑張るなさい」とだけ言ってくれたのは幸いだった。

その後、何年も経って自分が会社(日本信販)で新規事業開発に携わりスポーツビジネスの開発に取り組んでいた頃、末吉俊信さんに久しぶりに会った。会ったというより、自分から末吉さんにアポイントを取って出かけたのである。すでに末吉さんは毎日新聞にはいなかった。伊勢丹の子会社のスポーツクラブの責任者になっていた。世田谷にあった会社へ出かけた。学生時代に有楽町で会った時と末吉さんの雰囲気は変わっていなかったが、服装が変わっていた。ピシッとスーツで身を固めた姿はまさにビジネスマンそのものだった。自分たちはちょうど、東芝と共同で従来の形に拘らない新しいスタイルのスポーツクラブを立ち上げる準備中だった。まず、末吉さんにはスポーツクラブ業界の話を聞いた。まるで、数十年前の学生時代に、神宮球場で新聞記者だった末吉さんに六大学野球の話を聞いているような雰囲気だった。末吉さんの話し方には生真面目さも端正さも変わらずに残っていた。

末吉さんにスポーツクラブの運営の具体的な話を聞いたものの、その後、自分が携わっていた新規事業は最終段階で両社の調整ができないまま終結した。なお、東芝とのジョイントした事業開発には、自分が勤める会社から3人、東芝から二人の社員の計5人が東芝の高層ビルに小さな一室を持ち、広範な新規事業の開発を模索していた。事務所オープンに際しては、東芝の事業開発の役員が参加した。この小さな組織は自分が勤める会社の一つの組織として組み込まれていた。この時は2社で事業開発することの難しさばかりが目立って成果が出なかった。

東芝との関係では、さらに不思議な縁も感じた。日テレの赤木さんが野球部の岩本光弘さんを連れて福岡のわが社を訪ねてくれた時と同じようなことだった。東芝とジョイントでスポーツビジネスの開発に取り組んだ時に東芝から二人の社員が出向して来たことは書いた。岩本光弘さんは関連会社の責任者だったが、東芝本体の支社は別の所にあり、知り合いもいることからある日、支社を訪ねると、そこで迎えてくれたのがプロジェクトに参加していた男だった。東大法学部を出た男で、何を聞いても直ぐに答えが出る男だった。プロジェクト時代に比べ人間が丸みを覚えていることに驚いた。何でも、川柳に凝っているとのこと。なるほど、福岡の地下鉄に乗ると鉄道会社が募集する川柳の佳作が車内吊りに発表される。その男に会って以降、何回となく彼の川柳を地下鉄車内で見たことか。彼とはプロジェクト時代よりも軽く話ができ、二人で東京での回顧談や福岡の話で盛り上がったものだ。

＜「神宮球場長」は戦前早稲田の名捕手で監督も務めた伊丹安廣さん＞

神宮球場で印象に残っている人に伊丹安廣（旧佐賀中）さんがいる。すでに書いたが、伊丹安廣さんとの印象で一番は、何と言っても昭和35年秋の「早慶6連戦」の最終日のこ

とである。試合がこう着状態になっていたのも、すぐには終わらないだろうと気軽に伊丹さんと話に興じていたのが大きな間違いだった。自分のうっかりミスだった。伊丹さんとの話よりも早慶戦の試合運びの方が早かったのだ。話の最中に大試合は終わった。優勝の瞬間にはグラウンドに出て優勝の瞬間を撮り、監督の胴上げ写真を撮るとというのが描いていた構図であった。自分のミスのために優勝決定の瞬間や石井監督の胴上げ写真が撮れなかった。この時、伊丹さんとの話はネット裏の一番高い特別室の前だった。伊丹さんも熱心に話をしてくれた。伊丹さんも特別室の椅子から身を乗り出すような高揚感の中であったが、自分の質問にいちいち答えていてくれたのだ。試合が終わったのはアッという間であった。審判が言う「ゲームセット」という言葉はもちろん聞いていない。早稲田が勝った。伊丹さんも「君、急いで行かないと写真が撮れないよ」と大きな声で言ってくれたもののどうしようもなかった。球場全体が興奮に包まれ、身動きが取れなくなっていた。ネット裏の一番高いところからグラウンドまで駆け下りることなど、とうてい無理なことだった。階段を2段とびくらいで降りたつもりでも、すでにグラウンドの喜びの祭りはあっけなく終わっていた。野球担当としてはカメラを抱えて観戦していたのに写真が撮れなかったのは全くのミス。伊丹さんとのやや長い話が仇となった。しかし、伊丹さんのせいでは全くない。自分の注意力が散漫だったのだ。「早慶6連戦」を思い出すたびに、伊丹さんのことと優勝の瞬間の写真が撮れなかったことの悔しさが頭をよぎる。

他に印象に残っている人に長船駿郎氏がいる。この人も別項で書いた。さらに早稲田野球の大先輩で、時折会った人に北崎、宮崎康之さんがいた。北崎さんにはネット裏でインタビューをして新聞に載せた。宮崎さんはその後早稲田の監督に就任した人である。

日本テレビの赤木さんとは卒業してからも長い付き合いが続いたが、後樂園球場での一コマがある。赤木さんから会社で電話があって、巨人の試合があるので来ないか、という誘いだった。数日後、後樂園球場のネット裏席を目指して会社を出た。会社からは歩いて15分とかからない。ネット裏にあったアナウンサー席の近くで試合を見せてもらった。赤木さんは当時巨人戦の実況担当だったので、一緒に席で見るわけにはゆかなかった。この日も、かつての神宮球場の時と同じように球場正面の関係者入口で赤木さんの名前を言って入る方法だった。ネット裏席への入口である。この日は巨人対国鉄戦。この時も早慶6連戦を思い起こす一コマがあった。ネット裏の地下通路を歩いていると、国鉄スワローズの4番打者だった徳武定之さん（2学年先輩）とばったり会った。一瞬、徳武さんもキョトンとした顔をしていたが直ぐに「早稲田スポーツ」の野球担当だった自分を思い出したようだ。「元気でやっているか」というような声をかけながら急ぎ足でグラウンド方向へ急いでいった。この一言をかけるところが徳武定之さんの素晴らしい性格を物語っていた。

徳武さんは「早慶6連戦」の時の早稲田のキャプテンである。6連戦前の安部球場での練習を取材してお互いに顔は知っていた。徳武さんは自分が後樂園球場正面の地下通路にいるんだろうと不思議に思っていたかもしれない。徳武さんの顔はいかついが気持ちの優しい人で後輩の私たちの質問にもいつも丁寧な応答をしてもらった。後樂園球場で

突然、会っても嫌な顔を見せずに言葉をかけてくれるなどなかなかできないことである。

38 4年連続で乗った早大の「箱根駅伝応援バス」

「早稲田スポーツ」を創刊したのが昭和34(1959)年11月17日、晩秋だった。新聞販売に懸命になっていた頃、すでに競走部関係はもちろん、大学体育局事務所の中でも正月の箱根駅伝が話題になっていた。当時の箱根駅伝は中央大学の黄金時代で、来る年も来る年も中大が優勝していた。箱根駅伝は中大のためにあるのかと思うほど中央は強かった。

早稲田は数年にわたって苦難の時期に陥っていた。一人二人と優秀な選手が入学してくるものの安定した駅伝チームが編成できないなど苦闘していた。

「早稲田スポーツ」では、部員の担当運動部を決めていたが、まだまだ安定した活動ができないでいた。競走部の最初の担当は山崎茂だった。ある日、体育館事務所の田古島さんから「君たち、箱根に行かないか」と声をかけられた。瞬間、意味不明で聞き返したほどである。箱根駅伝には大学（体育局）が駅伝応援用の伴走バスを出すという。これは毎年の恒例だったようだ。そのバスに「早稲田スポーツ」も乗って行かないかという、ありがたい誘いであった。こんな良い話はないとみんなで喜んだのは当然である。箱根駅伝が行われる1月までは1ヵ月ほどしかなかった。みんなで相談して、大学御用達の箱根駅伝バスに乗せてもらうことにした。宿も大学が用意するので、一緒に泊まっても良いという。

創刊早々の「早稲田スポーツ」も大学（体育局）が出す専用バスに乗って箱根に行けることになったのだ。しかも、専用バスは選手を激励する伴走バスである。正月2日、朝7時過ぎには出発点の大手町読売新聞社前に集合だった。自分もバスに乗るため、朝早く起きたが、非常に寒かったことを覚えている。約半世紀前の正月は21世紀の現在よりも全般的に気温が低かった。起床は5時頃、7時過ぎには有楽町に到着、すでに多くの駅伝ファンが読売新聞社前に集まっていた。「早稲田スポーツ」では競走部担当の山崎を筆頭に松井と自分、そこに原田貞雄が加わっていたかもしれない。

バスに乗ると、中にいる人たちも大半が顔見知りの体育局関係者であり、あまり緊張することもなかった。当時の箱根駅伝には走る選手にも監督を乗せた伴走車が付いた。たいがいジープが使われ、選手の脇か前を走った。順調に選手が走っていれば、監督は何も言わないが一端、選手が苦しくなるとジープに乗った監督から大きな声が飛んだ。選手を落ち着かせるような声もあれば、怒声を浴びせるような声もあった。一番良いアドバイスは的確な助言である。一人で走る選手は孤独であり、的確な助言は走力に直接関係する。すでに、その頃東海道の渋滞が問題になっていて、駅伝の伴走車が交通渋滞の妨げになると言う意見が多かった。車が多いと排気ガスも多く排出される。選手の健康管理上も問題だ、と徐々に伴走車廃止の声が強くなっていた。今ほど近代的トレーニングが進んでいなかった時代、選手の走力も一般的には弱かったように思う。1区間20[＊]以上も走る箱根駅伝では走行中にも何が起こるか分からない。途中で走ることをやめたり、気を失う選手もあったりした。そうした時に活躍するのが伴走車であった。中には単に声をかけるだけでは済

まず、選手の頭にバケツの水を浴びせる監督もいたようで、伴走車については悲喜こもごもの物語が伝わっていた。応援の伴走バスに乗っていた私たちには満足に自校の選手の姿は見えない。見えたと思ったら他校の選手で、なかなかうまい具合に自校の選手の脇に付けて走ることはできなかった。車中で静かに携帯ラジオにしがみついて NHK ラジオ第2放送の実況を聞いていなければならなかった。しかし、応援伴走バスに乗ったことで箱根駅伝に参加したという一体感が生まれたのは事実である。箱根駅伝がテレビ放送(日本テレビ)される前の一コマである。

箱根に到着してしばらくはゴール地点周辺をみんなで歩いた。上位に入らない早稲田には物語がなかった。競走部担当の山崎だけは選手がゴールすると忙しくなった。疲れ切った5区の選手の顔を見るだけでも辛かった。競走部のマネジャーや先輩に往路の結果について話を聞いたが、みんな厳しい顔つきだった。夜は何をしていたのかは記憶にない。多分、「早稲田スポーツ」の人間だけが集団で行動し、早く寝てしまったのではなかったか。正月の箱根の朝は身体にこたえる極寒だけが今も記憶に残っている。数十年経ってプライベートで箱根に行き、湖畔の駅伝記念碑前に立つと、あの時の寒さを思い出した。復路は往路1位の学校が朝8時スタート、続き往路到着順のスタートとなる。この時ばかりは自校の選手を間近に見ることができる。しかもスタート地点であるため選手も元気だった。復路の元気な選手の姿を見たことで、やっと箱根駅伝に来たんだとの実感を持った。復路がスタートしてからは、直接自校の選手は全くと言っても良いほど見られなかった。それでも、伴走バスの中で、NHK ラジオの実況を聞きながら、箱根駅伝へ参加しているのだという連帯感覚を持つことができたのは何とも嬉しかった。

この不思議な箱根駅伝伴走バスには、何と都合4回も乗ることになった。4回乗った記憶は明確だが、最後の同乗が大学卒業直前だったか卒業の後だったかがはっきりしない。いずれにしても、最後に同乗した時には「早稲田スポーツ」の業務から離れていたためのんびりとした遠足気分だったことを覚えている。現在のテレビ中継される箱根駅伝とは全く違った箱根駅伝が行われていたのである。

39 丸紅飯田の社員だった河野洋平氏

「早稲田スポーツ」にとっても自分にとっても忘れ得ぬ人がいる。競走部OBの河野洋平(神奈川・早稲田高等学院)さんである。河野さんは当時の大物政治家・河野一郎(神奈川・旧小田原中)氏の長男である。叔父に参議院議長を務めた河野謙三(神奈川・旧小田原中)氏がいる。河野洋平氏は大学在籍中、競走部に所属し主務の仕事をしていたという。大学卒業後、商社の丸紅飯田へ就職した。ざっとこうした経歴である。

「早稲田スポーツ」創刊間もない頃は大学OBに依頼した原稿で紙面を埋めていたキライがある。自分たちの原稿だけでは紙面が一杯にならないという理由もあった。そんな時、真っ先に名前が挙がったのは競走部OBの河野一郎氏だった。彼は政治家の中で、箱根駅伝を走った数少ない一人である。一郎氏の弟の謙三氏も競走部出身で、一郎氏同様箱根を

走った人である。その頃（「早稲田スポーツ」創刊の頃）、二人とも健在で原稿依頼には最適だった。特に、河野一郎氏は総理を狙う保守系政治家の一人だった。政界での発言力も強く、影響力が強い人だった。こういう人が「早稲田スポーツ」に登場すれば、かなり目立つ紙面になるのではないかと、みんなで密かに期待をしていた。

河野一郎氏に原稿を依頼したいがどのようにすれば良いか、と少ない部員で頭を抱えた。後に、競走部マネジャーになる渡辺定恭が河野事務所で働いているという話を耳にしたが、私たちは詳しい情報を得られなかった。そのうち他人が攻めるよりも長男の洋平さんに依頼するのが最適ではないかという結論になった。この時、なぜか河野洋平さんに折衝する役目が競走部担当でない自分にきた。当時の競走部のマネジャーは河原さんという人で、どこに行けば河野洋平さんに会えるかを聞いた。河原さんは河野さんの勤務先を親切に教えてくれた。河野洋平さんが勤務していたのは丸紅飯田という大手商社だった。今は社名も単に丸紅となっているが当時は長い社名だった。現在の丸紅と違って、本社事務所は大手町か丸の内だった気がする。こちらは怖いもの知らずの大学1年生、一人で丸紅飯田へ出かけた。

河野洋平さんは学年で3年か4年ほど先輩だったが若くフレッシュな青年だった。まだ20歳代半ばの年齢だったと思う。当然、「早稲田スポーツ」のことは良く知らなかった。創刊の目的や部の現状などを説明した。さすが元競走部の人、早稲田のスポーツは詳しく「早稲田スポーツ」のことも直ぐに理解してくれた。話し方も態度も感じの良い人で、こちらの説明に嫌みひとつ見せずに聞いてくれた。「早稲田スポーツ」の誕生は早稲田にとっても良いこと、今後とも頑張るようにとの激励をもらった。肝心の要件、父である一郎氏の原稿についてはなるべく早く書いて渡すとの約束をもらった。感じの良い面談だった。意気揚々と大学に戻ってきた記憶がある。河野一郎氏の原稿は丸紅飯田社へ出向いてもらった。渡してくれたのは河野洋平さんではなかった。その時、河野洋平さんはアメリカへ出張中とのことだった。

もちろん、河野一郎氏の原稿は「早稲田スポーツ」紙上に大々的に掲載したことは言うまでもない。同じページに柔道部OBの西武鉄道社長の堤康次郎氏の寄稿文も載せた。堤康次郎氏の原稿をどのようにしてもらったのか、記憶は全くない。この二人の政界の大物を掲載したことで、大問題が発生した。

河野洋平さんからではなく、競走部OBのヒルタさんと名乗る人から「早稲田スポーツ」に電話が入った。何とか、と河野洋平さんに原稿依頼に行った自分は気が気ではなかった。自分は何か怒っている感じのヒルタと言う人に会うため、所定の場所へ行った。丸紅飯田ではなかった。時間通りに到着すると、電話をかけてきたヒルタという人が待っていた。かなり気難しい顔をしていた。何とかと思いながら挨拶もそこそこに用件を聞いた。ヒルタ氏は顔を紅潮させながら幾らか大きい声になった。「君たちは一体何をやっているんだ。河野洋平君が君たちの要求を気持ちよく受けて、河野一郎の原稿を渡したのに記事の扱いは一体なんだ」と言った。同じ紙面に西武の堤康次郎社長が載っていることに、

ご機嫌斜めになっているらしかった。河野と堤と一緒に紙面に載せるのがけしからん、というのがヒルタ氏の怒りのポイントだった。「大問題である」ときつく言う。これには未経験のことでもあり、すぐには回答が出せずに「申し訳ございません」と言って引き下がるよりほかはなかった。政治の世界にもいろいろと難しい問題があるのだな、と驚きながら大学へ帰ってきた。私たちは競走部と柔道部を代表する大物を選んで載せることに何の疑問も持たなかった。もっとも、河野洋平氏の代理と言ったヒルタ氏も多少言い過ぎたと思ったのか最後は静かな声になって「今後、こういうことのないように気をつけてくれ」と言って別れた。ヒルタ氏が出てきた背景には、河野洋平さんがアメリカへ行き、結局、アメリカの大学に留学することが決まったことがあった。もしかすると河野洋平さんは、自分が「早稲田スポーツ」へ原稿を渡すようにヒルタさんに頼んだことで、ひと騒動が起きていることは知らなかったのではないか。

河野洋平さんは米国から帰国して暫くして丸紅飯田社を退職し、父親が設立した配合飼料会社の社長に就くことになる。この配合飼料会社「日本糧穀」(後のニチリョウ)は早稲田から多くの社員を採用し海外展開までする会社へと成長していった。この会社に、我が友、松井盈も入社することになるのだから全く縁は異なるものである。

河野洋平さんの会社「ニチリョウ」には早稲田の運動部から多くの人が入社した。その中にわが友、松井もいた。一緒に大手新聞社を受験したが、力及ばず共に落ち、私たちの就活は思い通りに行かない苦戦の連続だった。ニチリョウに入社したのは運動部の役付部員ともいう立場にいた人ばかりで、マネジメント能力を求めたのかもしれない。多くは運動部のマネジャーだった。松井は「早稲田スポーツ」創刊を言い出した人間であり、マネジャーとはちょっと違う。運動部のマネジャーとしては渡辺定恭(競走部)などが代表者であろう。河野さんは直接こうした人たちと接して採用したに違いない。競走部でマネジャーをやっていた河原さんもすでに入社していた。しかし、時代の趨勢というか景気の流れというか、10年も経つと歯が欠けるように一人また一人と退社していったのは河野さんにとっては予想外のことだったかもしれない。もっとも、河野さん自身は社長に就いて間もなくの頃から父親譲りの政治の世界で大きく羽ばたいた。

河野洋平さんの思い出の一つに松井の結婚式がある。昭和40年代の初期だった。松井から結婚式の日取りの連絡が電話であり、ついては司会をやってくれとの依頼だった。媒酌人は松井が勤務する会社((当時はまだ「日本糧穀」だったか)の社長の河野洋平さんと言う。「早稲田スポーツ」の初期に河野一郎氏の原稿依頼で会って以来だった。式場は早稲田の大隈会館。実は、この前年、自分も大隈会館で式を挙げて司会を松井に頼んだ。大隈会館はまだ戦後建築の雰囲気が残る古い建物だった。河野洋平さん、というより河野洋平夫妻に改めて挨拶をした。河野さんには、父親の一郎氏の原稿依頼を行った時の記憶は当然、残っていたと思うが、特に何も言わなかった。河野さんは丸紅飯田にいた時にアメリカへ渡り、スタンフォード大学に留学し、帰国して父親・一郎氏が作った日本糧穀(ニチリョウ)の社長に就任した。松井は入社後、猛然と働き成果を挙げていた、と本人が胸

を張って言っていた。時折、会う時の松井の目が輝いていたのを記憶している。仕事に執念を燃やしていたのだろう。ただ、不思議なことに、松井からは早稲田から入社した人たちの話はあまり出なかった。河野洋平さんの奥さまは「伊藤忠」の創業者・伊藤忠兵衛の孫か曾孫に当たる人で清楚な感じの美人だった。何しろ、司会者の席からは仲人の河野夫妻の顔や姿は良く見えたものだった。河野洋平さんの媒酌人の挨拶は国会議事堂で見せた独特の河野節であった。

河野洋平さんは早稲田の運動部の組織「稲門体育会」の要職を経て会長になり、日本陸上競技連盟の中でも要職を担い会長に就任した。今も早稲田大学とは綿密な関係を保っている。河野洋平さんは自民党総裁に就任したが、自民党が野党時代で、総理には一步届かなかった。その後、衆議院議長を長く務めている。

早稲田関係の、特にスポーツ関係のパーティで河野洋平さんには何回か会っている。高輪プリンスで行われたパーティの席上では河野さんの周囲から人がいなくなった時、失礼ながら挨拶をした。自分の名前は出なかったが顔は覚えているらしく、すぐに「早稲田スポーツ」の名前が出た。「スポーツ新聞の人たちも頑張っているね」とねぎらいの言葉が出た。河野さんから直接、「早稲田スポーツ」の名前が出たことが嬉しかった。その後も大学の催事か何かで会った時には必ず「早稲田スポーツ」の頑張りを称賛してくれた。そんな時、二人だけになると、「松井君は早くて残念だった」と、元部下であり媒酌人も務めた松井の早い逝去を惜しみ、彼への賛辞と無念さを語ってくれた。河野さんは稲門体育会の会長を長く務めているが、我が同期の水泳部キャプテンだった梅本利三（故人）が会の常務理事(?)を務めていて、彼から河野さんの話は随分聞いた。「早稲田スポーツ」にも感心していると、何回も聞いたことがある。梅本利三は稲門体育会で河野さんの側近として働いていたので、河野さんのさまざまな発言も聞いていたのだ。

また、不思議な因縁を感じる出会いを思い出した。河野一郎氏の原稿がらみの話である。例のヒルタさんとの再会である。河野洋平さん経由で河野一郎氏の原稿が「早稲田スポーツ」に届きかなり大きく掲載したが、その取扱いでの問題だった。河野洋平さんはちょうどアメリカへ行っている時に、出来上がった新聞（「早稲田スポーツ」）を前に怒りを発したのがヒルタさんだった。驚くべきことにこのヒルタさんとの再会があったのだ。自分が大手電機会社の東芝とプロジェクトを立ち上げていた時である。上司の考えが業界トップ企業との新規事業開発の指示があった、ちょうど、その時、外務省の高官で幾つかの国の大使を務めていた人が転出の形でわが社に顧問として来た。しかし、この外務省重鎮は、昭和 40 年代に自分が赴任していた香港の総領事だった。つまり大使級の人だった（香港は英国の植民地で総領事）。この人に会うきっかけは自分の叔父が絡んでいた。32 歳の時、辞令が出て香港へ赴任する際、叔父は気を利かせて知り合いの国会議員からの総領事あての紹介状を持たせてくれた。香港着任後、紹介状の宛名の総領事をかなり高い所にあった日本総領事館に訪ねた。総領事は意外な感じがするほど柔らかい発想の持ち主で、その後

しばしば会う機会ができ、香港に来た社長との会食のセッティングをした。その人がカナダ大使を最後に、外務省を辞め、自分が勤める会社に来たのである。元大使と自分は意外な再開にびっくりした。この人の人脈は大変なもので、各界の主要な会社の人を知っていた。上司が求める業界トップ企業の重役陣をかなり知っていた。そんな時に紹介されたのが新日本製鐵だった。製鉄会社とクレジット会社と果して話が合うのか心配したが、元大使の行動は早く、日を置かずに大手町近くの新日鉄本社に行った。先方の役員が言うには、子会社に様々な事業展開をする会社があるので紹介する、という。数日して子会社に行った。何と自分の机も置いたこともある浜松町の東芝ビルだった。

その時、出てきた人の顔を見て、どこかで見た顔だと直感した。名刺交換をしてさらに驚いた。学生時代に河野一郎氏の原稿の件で会ったヒルタさんだった。かなり怒っていたヒルタさんである。二人は最初から不思議な顔をした。二人は、「アレッ」という言葉を発した。まさにその会社は新日鉄の子会社だった。ヒルタさんは昼田哲士（広島・盈進高）さんだった。そう言われればこの人の名前は聞いた、というよりも新聞などで見たことがあった。昭和30年初期の早稲田が誇る中・長距離の名選手だった。昭和29年の箱根駅伝では「昼田、失神のゴール」と言われ、中大をかわして優勝を飾った10区のランナー昼田哲士さんだった。昼田さんの失神ゴールは長い箱根駅伝の中でも語り草になるほど有名になった。今の人たちの頭にはない名前かもしれない。聞けば大学卒業後、八幡製鉄に就職し長距離ランナーとして活躍をしていたらしい。会社が富士鉄と合併し「新日本製鐵」に変わっていた。何でも、千葉・柏で展開しているスポーツクラブの会社の責任者だという。その会社には行ったことはないが、社名は柏生まれの自分には馴染みのあるものだった。まさか、新日鉄の子会社だとは知らなかった。その後、自分も新規事業開発の仕事から離れたため、昼田さんの動向は分からなかった。こんな偶然もあるのもだと不思議に感じた。昼田さんは河野洋平さんとほぼ同年代の人、河野洋平さんからかなり信頼されていたに違いない。

40 「早稲田スポーツ」草創期の広告取り

「早稲田スポーツ」の初期の頃の広告主は、主に大学周辺の商店が多かった。しかし、大学にはさまざまなサークルがあり、それぞれが収入源の広告を取るため、近くの商店を回っていた。毎日のように学生サークルの人たちの訪問を受ける商店側にしてみれば、堪ったものではない。全く仕事にもならない、と私たちも何回も苦言を言われたものがある。

ただ、大学界隈の店ばかりを対象に広告取りを行っていたのでは自ずと限界が出てくる。この旧態依然とした方法から脱皮することが、新聞の継続にも発展にも絶対に必要だと思っていた。さまざまな対策を練ったが、第一は卒業生を活用する策だった。つまり、運動部ばかりではなく、数十万人に達する早稲田の卒業生は全国のあらゆる分野・企業に分散している。大学OBを重点的に訪問し、広告獲得を狙おうということで、大手企業を中心に、手分けして訪問することを決めた。

自分の担当の一つに西武鉄道があった。西武鉄道には、早稲田の卒業生も多かった。西武鉄道の中心には常に堤一族がいた。しかも鉄道業は安定した経営を行っている。学生新聞として、広告を頂くには絶好の企業だと確信していた。大いに期待できるのではないかと思った。本当は先輩を見つけ、体育局からの紹介を受け、その人を訪ねれば良かったのかもしれないが、当時の西武鉄道は景気もよく、人を頼らないでも話ができるのでは、と自分は正面突破を試みた。何の紹介も持たずに池袋駅近くにあった西武鉄道本社広報部門を訪ねた。

担当部門に行き、こちらの説明を聞いてもらうべく担当者と呼んでもらったが、なかなか人が出て来なかった。早稲田の学生が広告取りに来たので誰か出てみろ、くらいにしか受け取られなかったらしい。待たされて出てきた人は40歳を超したくらいの人だった。真面目に話を聞いてくれたが、すぐに結論は出ない旨言われた。この日は単にこれだけのことで終了。諦めずに翌週も、さらに次の週も定期便のように担当者に会いに行った。先方の人が嫌みを言わずに会ってくれたことが何回も繰り返す要因だった。2ヵ月目ぐらいに、先方がこちらの熱意に負けたのか「それでは良く上司に話をする」との返事が出た。結局、上司の許可が取れたと言って「半5段」の西武鉄道の広告が取れた。自分にとっては何の紹介もなしに大手企業の広告が取れた最初だった。今でもその人の顔は臉に浮かんで来ることがある。

他に自分の担当ではなかったが、忘れられない広告主の一つに「タチカラスポーツ」がある。会社（店舗）は東京駅八重洲口を出て間もなくの所にあった。この会社はもともと「明大スポーツ」の広告主であった。「明大スポーツ」の鈴木宏編集長から聞いていたのか、わが「早稲田スポーツ」も広告掲載の依頼にタチカラへ相談に行った。この時の担当は誰だったのか、はっきりしない。自分も何回か担当と一緒にタチカラに行った。結局、タチカラの社長は明大スポーツに載せているのだから「早稲田スポーツ」にも載せようと言った。その後、後輩の誰かがタチカラの社長に頼んで「タチカラ杯」争奪の早明スポーツ新聞の野球大会をやることになった。タチカラは野球ボールの有名ブランドでもあった。第1回を明治のグラウンドがあった八幡山で行った。当時はこうした気の利いた広告主がいたのである。

「早稲田スポーツ」の仕事では当然、スポーツを取材し記事を書く。しかし、創刊以来、大学の機関紙ではなく独立採算の部であるため、広告取りのウエイトの方がむしろ高かった。広告収入がないと新聞制作が続けられないからである。大学構内での販売額は知れたもの。いかに多くの広告収入を稼ぐかが、「早稲田スポーツ」の死活問題に直結していた。従って、多くの広告収入を得た者の発言力が強くなっていたのは事実である。

広告料はともかく、紙上に掲載される広告で一番長く続いているのは大学近くのレストラン高田牧舎である。今でも「牧舎のカレー」という凸版が紙面に出ている。

41 「早稲田大学スポーツ年鑑」の発行

「早稲田スポーツ」の草創期には筆舌に尽くしがたいほどの苦労の連続が続いた。それでもわずか6人の部員の努力が実って昭和34（1959）年11月17日に創刊号を誕生させた。こ

の時の苦勞の連続は、学生が体験できる実社会への入口をこじ開けるようなものだった。事業を起こすには、まず資金が必要であることを教えてくれた。ポツと大学に入ればかりの人間にはかなりの難問であったが、一つ一つ鍵を開けるように解いていったのも事実であった。さまざまな人間関係を体験したのも、その後の活動には大いに役立ったものだ。新聞発刊を言い出した松井が、事業を起こすには「ヒト・モノ・カネ」のすべてを満たす必要があるということをどこまで頭に入れていたのかは分からない。松井をはじめとした部員6人はあまり物事を難しく考えずに、怖いもの知らずで、正面突破を計り、数えきれないほどの失敗も重ねた。学生の力には限界があったが、幸い運も味方して、分厚く硬い扉をこじ開けたと言っても過言ではない。部員一同、何度も挫けそうになった。力いっぱいやれば何とかなる、との甘い考えが私たちの頭にあったのも確かである。

まず、創刊号発行に際して資金問題に直面したが軟式庭球部監督・板野寿夫氏からの資金提供（借金）によって突破できたことが「早稲田スポーツ」にとっての第一の幸運だった。返済のメドも明確にはないままに借金を申し出、「君たちの情熱を担保に貸そう」と言ってくれたのである。松井の母親・澄子さんの数々の援助も忘れがたい。神奈川新聞社への印刷代の支払い繰り延べなど、一般学生の母親としては考えられないほどの支援があった。これらのことは筆舌に尽くし難く、いつまで経っても忘れられないのは当然である。苦難に直面しながら、前向きに頑張るという「早稲田スポーツ」部員の情熱だけでは新聞はできないということも実感した。特に新聞発刊を言い出した松井にとっては、部員の活動停滞が一番恐ろしかったに違いない。常に、次の一手を考えてゆかなければならなかった。

「早稲田スポーツ」は、すでに存在していた「明大スポーツ」にヒントを得てスタートした新聞であったが、実は次の一手のヒントも明治大学にあった。明治大学体育会が発行する「明治大学体育会誌」という年鑑がそれである。松井の頭の中には「早稲田スポーツ」創刊直後から早稲田の「スポーツ年鑑」発行の意欲が芽生えていたに違いない。松井から最初に「スポーツ年鑑」を発行しよう、と言われたのは、初の夏合宿、軽井沢・信濃追分清原別荘の席であった。夏合宿は、昭和（1960）年の夏、早稲田スポーツ新聞会会長の清原健司教授が持つ軽井沢追分の別荘で行われた。清原さんは中軽井沢出身で旧制上田中学から早稲田高等学院に進学し、大学の文学部に入った人である。軽井沢・追分は清原さんの地元であった。

別荘の敷地は広大で、敷地の中を浅間山方面から来る小川が流れていた。敷地内には家が2軒も建っていた。敷地の隣接地は中山道の追分宿の古社・浅間神社であった。敷地内の2軒の別荘のうち、新しい家を清原さん一家が使い、別の1軒を来客用に使っていると言う。

「早稲田スポーツ」初の夏合宿を軽井沢・信濃追分に決めたのは偶然である。たまたま、私たちは部の団結を強めるためにも初の夏合宿をやりたいと清原さんに相談した。清原さんはすぐに賛成して、「場所や宿は決めたのか」と聞いてきたので、「全てはこれからです」と答えた。即座に清原さんから、「私の別荘を使いなさい」との案があった。

松井と自分は思わず顔を見合わせ喜んだ。追分の別荘敷地内には時代がかった茅葺の家が

1 軒あるが、それは来客用に使うので、普段は空いているという。その家を使ったらと、言ってくれたのだ。こんな良い話はないと思った。先生は、自分の一家も夏休みには家族で出かけるが君たちの方には顔を出さない、と気遣ってくれた。まさに渡りに船であった。

話を「スポーツ年鑑」のことに戻す。夏合宿での松井の突然の提案にみんな顔を見合わせるばかりだった。いつも一緒にいる自分も、年鑑発行の計画は知らなかった。タイミングを見て提案しようと深く胸にしまっていたのかもしれない。

「早稲田スポーツ」部員の誰もが「明大スポーツ」は知っていたが「明治大学体育会誌」（年鑑）の存在は知らなかった。「早稲田スポーツ」の部員全員は、日頃の新聞発行に全精力を使い果し、年鑑を発行する余力はまるでなかった。夏合宿には私たち同期はもちろん、学年で2年上の先輩部員、それに正規に入部してきた1年後輩の諸君も揃って参加して、総勢は10人以上になった。初の合宿は新聞創刊の翌年で、資金問題の解決には至っていなかったが気分的には余裕があった。合宿の主たる目的は、素人集団でスタートした「早稲田スポーツ」を少しでもまともな新聞に仕上げることにあった。つまり「新聞」を勉強する会であった。新聞に関する様々な研究を各自分担して行い全員の前で報告し、議論をするという方法をとった。この報告自体、やはり素人集団のやること、どこまで実のあるものだったのかは分からなかった。さらに「早稲田スポーツ」をさらに多くの学生に読んでもらうための拡販問題もテーマにした。それなりに意欲的な議論が行えたと思っている。

この時、年長の先輩部員が参加したとはいうもののみんな若者、時には旺盛なエネルギーを持て余し、和室の会議室を飛び出して、草が一面に生える庭に出て散歩を楽しんだ。自分は柏（千葉県）の田舎育ちで草一杯の庭には慣れていたが、ほかの部員にとっては珍しかったのではないか。時には庭で相撲を取ったり、相撲が部屋の中に持ち込まれたりしていた。若者の余力は夜まで持ち込まれることもあり、座敷での対決になって部屋の床を抜いた猛者もいた。こんな時の清原さんの母親（グランマ）のやんわりとなだめるように叱る言葉遣いが今でも頭に残っている。おばあちゃんは清原家ではグランマと、英語流に言われていて、都会の家族の会話だと感心した。このグランマの優しい物言いが若者には老練な教師の指導のように聞こえたのも事実である。グランマは私たち「早稲田スポーツ」部員に信濃追分の歴史や浅間山の登山などについて、庭の草の上でいろいろと教えてくれた。部員一同が浅間山登山を決行したのもこのグランマの勧めによるものだった。

再度、「スポーツ年鑑」の話に戻したい。

清原別荘での会議がひと段落した時、松井が突然発言した。「我々は念願の新聞を創刊し、苦しいながらも継続できている。次はスポーツ年鑑を出したい。早稲田のスポーツは学生スポーツ界のリーダーである。しかし、残念ながら年間を通した各運動部のまとまった記録が残っていない。もちろん、各部ごとに整理された記録はあると思うが大学として一本化した記録がない。そこに、年鑑を発行する意義がある。体育局所属運動部のすべての記録を一括して残すことも我々の義務だとも思っている。年に一回の年鑑を発行できるのは我々しかない。この新しい企画にぜひ賛成してほしい」と熱弁をふるった。

この話を聞いた一同は、咄然となった。熱意の塊の松井が放った第2弾の強烈な企画であった。この時、誰も企画自体を満足に理解できなかった。第一、新聞と違って、記録集のような出版物は大学自体が行うべきで、何の収入源を持たない「早稲田スポーツ」が行うべき代物ではない、というのが集約された意見であった。新聞と違って「スポーツ年鑑」は学生に大量販売ができるとは誰も思わず、ましてOBに対する販売はさらに難しそうだ、と思っていた。従って、会議の場で誰一人松井案に賛成をする者はいなかった。一瞬、白けた空気が流れたが、すぐに年鑑発行案がなかったかのように次の議題へ移った。新聞会のサブを務める自分としては早く板野監督からの借金を返し、一人でも多く読者を獲得することの方が優先事項だろうと冷めた見方をしていた。

結局、「スポーツ年鑑」発行は夏合宿では提案のみに終わったが、妙に頭に残る課題だった。夏休みが終わると、すぐに秋の「早慶戦特集号」の準備が待っていた。早慶6連戦はさまざまな形で「早稲田スポーツ」に恩恵を与えてくれた。その一つが「早稲田スポーツ」の財務状態の改善だった。板野寿夫さんからの借入金も一括返済できた。神田・小川町のウラネオン社に板野さんを訪ね丁寧な挨拶をしたのは当然のことだった。板野さんは期待していなかった金が返ってきたと満面の笑みを見せ、丸い顔を一層丸くしたのを覚えている。

松井は早慶6連戦が終わった11月の終わり、強引に編集長職を自分に譲ると言いだした。仮部室として使っていた体育館事務所を一緒に出て帰途についた時、「ちょっと相談がある」と言って自分を引きとめ、いつも使っている喫茶店に入った。何の相談事があるのかと、多少、気になった思いがあった。椅子に座るとすぐに話を切り出した。「編集長を交代したい」、一瞬何を言っているのか分からなかった。自分としては、1年後輩に優秀な人材が揃ったので、後輩たちが3年になるまで松井が編集長を続けるべきだと思っていたし、日頃も本人に強く言っていた。創刊期の同級生部員、その頃にはすでに福山龍介と本多統の二人は部活動から離れていたのも、残る創刊期の山崎茂と原田貞雄も自分の意見に完全に同調するに決まっている。それが自然の形だと思っていた。ところが、突然、松井は編集長の大役を自分に振ってきたのだ。二人で、あまり客が少ない薄暗い喫茶店で長い時間議論をした。松井は延々と持論を展開した。それも、創刊当初からの考えだと強調して話を続けた。そこには松井の同期の自分を思いやる心と同時に周到な計画が潜んでいたように思えてならない。松井の頭には追分の夏合宿以来、「スポーツ年鑑」発行計画が部員全員に反対されたものの、胸の内では消えるどころかますます強い執念となって醸成されていたのは間違いなかった。

本件も、別項で多少書く。

そうした二人だけの話し合いの結果、突然とも言える形で「早稲田スポーツ」の編集長交代が実行された。松井は、自身は新聞発行活動から身を引いて「スポーツ年鑑」に精力を注ごうと考えていたのだろうと思う。翌昭和36年（1961）の正月過ぎから松井は自身の担当部の取材をこなしながらも「早稲田スポーツ年鑑」の準備に入ったのである。一人で黙々と資料集めをやる姿に私たちも黙っているわけにもいかず、徐々に部全員での支援体制を考えるようになった。ただ、自分としては「早稲田スポーツ」編集人としての役割で多忙を極め、

とても年鑑発行の準備までは気も手も回らなかった。このへんの経緯は本人が亡くなった現在、確認のしようもないが大きな違いはないだろうと思う。「スポーツ年鑑」の発行計画の部員全員への説明も日頃の新聞発行とは違って大変な苦勞だった。何とか「早稲田スポーツ」が一致団結してスポーツ年鑑発行のための支援体制を築くことができた。

ある時、松井が年鑑発行の具体的スケジュールを持ってきた。かなり細かいところまで詰めた計画であった。この計画案の提示を境に「早稲田スポーツ」全体で年鑑発行に臨むことになったのは自然の成り行きであった。改めて、自分は松井と二人でスポーツ年鑑の発行について何回も話し合いを持ち、具体的な計画案を作成した。「スポーツ年鑑」は記録と写真、さらに少々の寄稿文を載せることにした。この計画の発案に対して、まず清原健司会長に、次に体育局長の赤松保羅教授に報告に行った。「早稲田スポーツ」を創刊してまだ間もないのに大丈夫か、という言葉が二人から異口同音に出たのは当然だった。「早稲田スポーツ」創刊に際しても大学に対して資金提供を申し出た二人のこと、今度も資金のことを言い出すのではないかと二人とも心配したのは間違いない。「スポーツ年鑑」発行に際しても資金問題は最大の難関であった。それも年鑑という性格上、大量販売が見込めない状況では、広告主が苦い顔をするのは当然である。ただ、新聞創刊の時と決定的に違ったのは年鑑発行に対する当局の考え方の違いだった。大学から金が出ないのは同じでも、年鑑発行の意義は十分に理解できるので、側面からの支援は確約すると明言してくれた。

こうなると、「早稲田スポーツ」自体で「スポーツ年鑑」発行にどれだけ力を注げるのかにかかってきた。始めたからには引くわけにはゆかない。それが言い出した松井の頭にあるのは当然。年鑑本文の大半は各部から収集する記録、主な選手の寄稿文、それに写真が中心である。巻頭には体育局長赤松保羅氏の「発刊によせて」と題する文章を載せるという構想が出た。やはり、最大の問題は制作費の主体となる広告収入にあった。どれくらいの広告収入が実現するか成否の全てがかかっていた。この点は体育局長が確約した先輩が勤める大企業への紹介状が頼りの一つだった。ただ、肝心のOBの人たちを私たちは知らない。広告収入が見込める企業一覧の作成から始まって、対象となる運動部OBたちへの電話作戦を始めた。「スポーツ年鑑」発行に向けた最初の活動がこの電話作戦だった。部員全員が手分けして大企業へ電話をかけまくったのである。すでに「早稲田スポーツ」が発行されており、新聞の実物を持って大企業のOBたちと話ができたとのことが幸いした。

「早稲田スポーツ」を創刊する時に体験した冷淡な対応は大企業からは受けなかった。すでに「早稲田スポーツ」発行の実績があることが大きかった。体育局からの支援協力が大きかったが、大企業に勤める早稲田のOB社員たちの好意的な協力が大きかった。さらに、新聞発行という実績を持っていたことが部員の自信に大きくつながった。結果として、これまで「早稲田スポーツ」紙面に登場していない大企業が多く賛同してくれたことが喜びだった。早稲田が持つネームバリューの力を感じたものだった。

ちなみに「スポーツ年鑑」第1号に掲載された主な広告企業名を挙げると一

朝日生命、朝日麦酒、伊勢丹、三共、西武、大成建設、高島屋、大和証券、東洋高圧、大昭和製紙、東芝、中外製薬、日興証券、日本化薬、日本生命、日本石油、日本鋼管、野村証券、日立製作所、富士製鉄、古河電工、松坂屋、八幡製鉄、雪印乳業

など、当時日本を代表する企業 77 社が名を連ねた。「早稲田スポーツ」の編集人としては、この半分の会社が本紙に広告を掲載してくれば、どれほど通常の号の発行が楽になるのだが…と思うことしきりだった。

半年以上の時間をかけて、昭和 36 年（1961）7 月「早稲田大学スポーツ年鑑」の第 1 号、1960 年版が完成した。前年の軽井沢・追分夏合宿で松井が言い出してから、ほぼ 1 年である。「早稲田スポーツ」創刊の時に見せた松井の堅固な意思の結晶として、また新しい成果が誕生した瞬間だった。「早稲田スポーツ年鑑」の発行は予想以上に大学当局からは評価されたものだった。第一、この種の刊行物は大学自体の事業であって、学生の会が単体で担当するものではない。「早稲田スポーツ」が発刊した「スポーツ年鑑」に対し、体育局長の赤松保羅教授は「発刊によせて」と題する文章の中でその喜びと期待を述べた。赤松局長は、年鑑発刊の裏には通常の「早稲田スポーツ」新聞の発刊が大きな意味を持っていた、と賛辞を述べている。その一部を抜き書きする。

かつて、運動王国と讃えられ、学生スポーツ界の雄であった早稲田大学が、当然もっと早く、誰かによって、何等かの形で有つべきものは、スポーツ新聞であったと思う。幸い先年時宜を得て、吾が「早稲田スポーツ」新聞が、全く学生達の自力の努力によって発刊された。今春、創刊されてから既に一年有半を迎えた由、其の間、学生スポーツ新聞としては、経済的精神的其の他種々の困難な事情の下で、而かもよく其の使命と役割を可なり立派に果たし得たことは、一面その関係する先輩諸兄の好意ある援助と激励の賜物とは言え、殆ど凡て編輯関係の学生諸君のメリットに帰せられるべきものと思う。…今度、幸い此の要望に答えて、他の大学に魁けて、「早稲田スポーツ年鑑」の発刊されたことは、洵に先見の明を得た賢明な企画であって、編輯学生諸君の聡明と実行力に衷心から慶祝と敬意を表すると共に、大なる期待を与する次第である。…。茲に、「早稲田スポーツ年鑑」の発行を重ねて慶祝し、弥々将来の御発展を念願する次第である。

松井は「早稲田大学スポーツ年鑑」の発刊に当たって、そのほとばしる熱気を巻頭の「発刊の言葉」と巻末の「編集後記」の中に表わしている。「発刊の言葉」の一部を書く。

学問に国境がないと同様にスポーツは世界共通のものである。殊にアマチュアスポーツにはプロスポーツにはない、はつらつとした純粋さがある。それだけにスポーツ界における学生スポーツの比重も大きいものといえよう。長い年月のうちに培われてきた早大運動各部の精神はそのまま記録にも表われ常に我国の学生スポーツ界に覇を唱えているといっ

でも過言ではなかろう。こういったことに本誌を発行する一つの意義がある。我々の意図するところが単に記録の蒐集だけではなくこの記録を省みて各部が発展するのを願うのは勿論である。

なお、既述した通り「スポーツ年鑑」の制作時の「早稲田スポーツ」の編集長だった自分が年鑑第1号の編集人として奥付に名前を連ねているが、これは当時の「早稲田スポーツ」の編集長としての立場を表したにすぎない。年鑑発案者の松井が全ての計画を作り行動を指揮したのは言うまでもない。その後、毎年1巻ずつ刊行されたが第7号をもって「早稲田スポーツ年鑑」はその任を終えた。現在では当然とはいえ、早稲田大学競技スポーツセンターの管轄のもとに「早稲田大学スポーツ年鑑」が刊行されている。本来、大学が自校体育局に所属する各運動部の記録を収集し保存するのが当たり前のことである。この一見、地味で収益的には何のメリットもない、年鑑づくりに松井はなぜ拘ったのだろうか、真実は不明である。「明大スポーツ」に倣って「早稲田スポーツ」を発刊した時と同じような、いわゆる男の意地がそうさせたのかもしれない。当時の体育局活動の一環を担ったとも言える事業だった。現在の「早稲田スポーツ」の部員の中にも「年鑑」の存在を知る者は少ないか、全く知らない部員が多いと思う。「早稲田スポーツ」が編集した「早稲田大学スポーツ年鑑」は、現在では化石にもたとえられるほどの存在になっているが、約半世紀前の学生の努力の結晶であることには違いない。

42 高田牧舎は運動部員の梁山泊

—創業 80 年記念誌「牛の歩み」に松井盈と共に寄稿—

高田牧舎の先代の女将・藤田英子さんの早稲田の運動部関係者との交友は実に広い。私たちも学生時代に藤田さんと店で話をしていると、必ずと言っても良いほど運動部の誰かがやってくる。そして藤田さんが紹介をしてくれる、さらに次の人に繋がり私たちの交友関係も広がっていった。どれほど多く運動部の人と高田牧舎で名刺交換をしたか数えきれない量である。運動部の人ばかりではなく、高田牧舎には大学の有名教授も出入りしていた。どこかで見た顔だと思う人の大半は教授や体育局関係者だった。

自分が会社の神戸支店に勤務していた昭和 55（1980）年の半ば藤田さんから手紙が届いた。高田牧舎の女将さんからわざわざ手紙が来て一瞬驚いた。手紙の中には、高田牧舎創立 80 年周年を記念する小冊子を発行する旨の手紙が入っていた。しかも、挨拶文の他にハガキが1枚入っていた。具体的には、高田牧舎縁りの人を対象にハガキ1枚の文章を依頼する旨が書いてあった。つまり、学生時代の高田牧舎について書いてほしいという文面だった。ハガキ1枚に収まるように高田牧舎の思い出と創立 80 年を祝す文章を書けばよいと判断した。しかし、どのような人に文章を依頼したのかも分らず、果たして自分が書いて良いのかと暫く判断に窮した。この時、この依頼は当然、松井にも来ていると思い連絡をとり、互いの意見を語りあった。牧舎のオバサンからは「早稲田スポーツ」の二人に依頼が来ていたの

だった。電話では牧舎のオバサンからの依頼をむげにもできず、必ず返事を書こうと確認した。ハガキ1枚の中にはそれほど多くの文字が書けない。何が書けるのだろうかと思案した。少しためらったが、思い切ってハガキに小さな文字で創立80年の祝意と学生時代の高田牧舎の思い出を書いて投函した。高田牧舎は明治38(1905)年創業ということをその時に知った。このハガキが何枚、どのような人に送られたのかは知る由もなかった。ハガキ1の文章を並べる本を発行するなど高田牧舎のオバサンの企画力にびっくりすると同時に感心もした。

数ヵ月後、濃い緑色の表紙に「牛の歩み」(B5版、56頁)と印刷された小冊子が送られてきた。中身は、みんな同じ条件でハガキ1枚に書いた祝いの文章を並べて掲載したものだった。中にはどう見てもハガキ1枚では書けないほどの多くの文字が並んでいる文章があった。しかし、掲載されている名前をみて驚いた。早稲田で80年もの長期間営業をしている高田牧舎にとっては当然と言えば当然であるが、昔、早稲田に学んだ大作家や大教授の名前が羅列されているではないか。この中に自分の拙い文章も載っているのかと不安になって、恐る恐るページを繰ってみると、石田博英(政治家)、井伏鱒二(作家)、大西鉄之祐(ラグビー全日本監督)、織田幹雄(オリンピック金メダリスト)、坂本朝一(NHK)、藤波孝生(政治家)、篠田正浩(映画監督)、堀江忠男(早大教授・サッカー部元監督)、藤田明(日本水泳連盟)氏などに混じって松井と自分の名前が載っているのには驚くやら恐れ入るやら。藤田英子さんの「早稲田スポーツ」に対する思い入れの深さが見て取れ感謝するばかりだった。ところで、どう見てもハガキ1枚の量とは思えない文章が自分の次に載っていた。それは松井の文章だった。彼の牧舎に対する熱意がそうさせたのだろう。

高田牧舎創業80年記念の「牛の歩み」の出版記念パーティが昭和57(1983)年11月8日に大隈会館(旧)で開かれ出席した。もちろん、早稲田関係者が多く、特に運動部の関係者も多かった。初対面の人もあり多かった。みんなかなりの年配者で、多くは日ごろからどこかで会っている人ばかりだった。藤田さんは巻末に「随想」として数篇の文章を書いている。「牧舎の息子たち」、「若き日の篠田助監督」に加えて「早稲田スポーツ新聞」との一篇を書いている。松井の「早稲田スポーツ」に対する熱意を書いている。以下、抜粋である。

早スポ発刊のきっかけは、松井さんの高校同級生が明大スポーツ新聞に入ったという話をきいたからだそうです。…当時早稲田のスポーツは各部栄光に満ちていたにもかかわらず、これを一般学生に伝えるパイプがなく、国文専攻の松井さんは同級生4人と語らって第一号を送り出しました。…遠慮のない私は「1年続くかしらと思っていたのにね。」と健闘をたたえましたものの、廿三年の間には時にピンチもありましたことでしょう。…。早スポには創刊以来記事中に小さなカレーライスの広告を出しております。つい最近まで一回五百円でした。安くして頂いてありがとう。

藤田さんが書いた文章には、早スポ誕生時のささやかな事実が述べられている。他の寄稿

者もハガキ1の文章のため、ノンビリと読むには格好の冊子である。現在の高田牧舎の店主に聞くと、牧舎創立80年の祝賀会を開催したことは聞いているが、「牛の歩み」の小冊子は店にもないし見たこともないという。この小冊子も時代の流れの速いことを証明している。

高田牧舎には、当時（昭和30年代中ごろから後半）ラグビーのほか水泳、スキー、バスケットなど多くの運動部の人が集まっていた。先輩から受け継いだ、なじみの店なのだ。「早稲田スポーツ」第2代会長に就任してもらったラグビーの大西鉄之祐氏も、高田牧舎で良く見かけた一人である。大西秘書課長は「早稲田スポーツ」の誕生を喜び、多くの支援を惜しまなかった。当時の総長大浜信泉氏へのインタビューが直ぐに実現したのは大西さんがいたからである。大西さんにとって、高田牧舎は古い付き合いの店であった。藤田英子さんの亡くなったご主人もラグビー部に関係する一人だったと聞いたことがある。そうした関係から大西さんは早くから牧舎のなじみ客であったのだ。そうした関係を後に聞くと、早くから大西さんを牧舎で見かけた理由がわかろうというものである。

藤田さんは気さくな人で、誰からも好かれていた。また、牧舎のカレーは安くて美味くて学生にも手軽に食べられる料理だった。それに、他の学生相手の食堂に比べかなり洒落た雰囲気を持つ店でもあった。牧舎に行くと藤田さんと話をしていると、必ず運動部の誰かがやってくるので私たちにとっては絶好の取材の場でもあった。自然と運動部の情報が入ってきた。高田牧舎はまさに早稲田運動部の梁山泊だったのだ。また、藤田さんに気取った所がなかったのも私たちの足が牧舎に向いた理由の一つであった。学生時代に数えきれないほど入った高田牧舎も新聞を創刊する前はとても上品な店に見え、入るのに時間がかかったのも事実である。大学界隈にある多くの飲食店は学生が多いためかどことなく雑然としていて落ち着きがなかった。その点、牧舎は古い店ながら格式を思わせる上品さがあった。藤田さんの性格や集まる客層を知るに従って、牧舎は自然と「早稲田スポーツ」のなじみの店になっていった。

牧舎の裏手にあった「早稲田茶房」という店も忘れ店であった。店の入口も店の中も何となく暗く格式が高そうな感じがした。店中にコーヒーの香りが充満し人を引き寄せる力があった。ゼミの教師やゼミの仲間たちとは良く入った店である。この店は庶民的な感じと高貴な感じが混在していたようだ。店の顧客には早稲田を愛する教授や若手の作家たちがたむろしていたと後に知った。店主は客が入って来てもいちべつするだけで、言葉を交わさない所が良かった。今はその文学的な匂いがした早稲田茶房も早稲田からは消えてしまった。

43 軽井沢取材余話—些細な衝突の一コマ—

部会で議論した時など対決することが多かった松井と自分は、通常の新聞活動ではともに行動し良く話し合いもした。新聞発行に情熱を燃やす真の友人だった、と今になって振り返ると一層、その感が強い。普段の行動では二人は常に一緒のケースが多かった。新聞の仕事がない時は二人とも良く授業に出ていた。これは、日頃から決めていた二人の約束事でもあった。「早稲田スポーツ」は教育学部の国文学科のクラスCの中から立ち上がったので、2

年までの英語の授業では部員 6 人全員が同じクラスの学生だった。自分としては普段はなるべく新聞と関係ないクラスメートとの付き合いを多くするようにしていた。また、松井も自分もクラスの中で「早稲田スポーツ」の話はあまりしなかったのも、クラスの人たちは私たちが部会で激しい議論をしていることなど、想像もできなかったのではない。あるいは、私たちが一緒に「早稲田スポーツ」をやっていること自体、知っている人は少なかったかもしれない。松井との付き合いは語り出したら際限がない。性格的には二人は正反対だったので、複雑な議論をする時には、ほとんど対立していた。意見が真っ向から逆だったこともしばしばで、こういう思い出は高齢になると共に蘇ってくる。夫婦だったら、たちまち離婚だったかもしれない。二人が離れずに活動が続けられたのは、「早稲田スポーツ」という極めて厳しい難問に取り組んでいたからだだろう。この難問を何とか克服したいという意欲があったからだと思う。私たち二人にとって「早稲田スポーツ」に関する議論は、楽しい学生生活の一部になっていたのは間違いない。

新聞創刊後それほど時間が経っていない頃（昭和 35 年初夏だったか）、二人は編集会議で運動部の夏合宿の取材を決めた。決まれば行動は二人とも早い。夏の運動部は比較的長野県信濃路での合宿が多かった。信越線で二人揃って上野から出発した。車中でも仲良く駅弁を食べ、運動部の話などをして過ごしていた。軽井沢駅に到着するまでは何でもなかった二人の関係が、どういうわけか駅を出る頃には、どうしようもなくこじれてしまった。軽井沢・離山山麓の早稲田グラウンドでは野球部が毎年合宿を行っていた。離山グラウンドは軽井沢の別荘地に近い場所にあった。人づてに聞くと、投手陣はグラウンドから離山山頂往復を毎日やって足腰を鍛えていたという。夏合宿は秋のシーズン前の重要な合宿である。その合宿を直接見ることが目的の軽井沢行きだった。多分、その野球部の合宿の記事の扱いが原因で二人は衝突したに違いない。自分が「野球、野球」と野球に取りつかれたように言うことに、松井の腹の虫がおさまらなかったのだ。こうなると野球好きの自分と「各部平等に」との考えの強い松井は必然的に衝突するほかはなかったのだ。このあたりから、野球の早慶戦特集号の発行問題がくすぶり出した。二人とも一歩も譲らない。離山グラウンドで目的の取材を終えても二人は口を利かなかった。次の予定もあり、離山グラウンドを出て中山道を西に向かう時、無言のまま歩くほかはなかった。唯一、解決策は時間の経過だけだった。しかし、考えて見れば何とも幼い衝突であった。

離山グラウンドから次のバスケットボール部の合宿地、中軽井沢まで行かなければならぬ。私たちは車もなく、当然、歩くほかはなかった。二人は互いに口にこそ出さないものの「一緒に行くのはご免こうむる」との考えで、お互い知らん振りだった。「勝手にしろ、もう一緒に取材はしない」という気持ちが腹の中で渦巻いている。こうなったら、次の中軽井沢まではのんびり行こうと、自分は離山近くの小さな食堂に入り昼飯を食うことにした。取材は一人でも十分だ、と言う気持ちが強かった。しかし、バスケットボール部のマネージャーには、すでに訪問の時間を伝えてあった。それほどとのんびりとはできなかった。当時、「早稲田スポーツ」には余裕の金はなく、取材は全て公共交通機関を使うことになっていた。タ

クシーなど使うなどもってのほかだった。従って、旧軽井沢から中軽井沢ぐらいは当然歩きだ。

こんな時に思い出したのが昭和中期に軽井沢に住んでいた文学者たち、堀辰雄や室生犀星などの交友である。彼らの文章を読むと互いの行き来は歩きであったことを知っていた。室生犀星の家は旧軽井沢、堀辰雄の住まいは信濃追分でその距離は相当なものである。鉄道の駅でも三つにまたがる。正確な距離は分からないがこの長い距離を彼らは歩いていたのである。それに比べれば、軽井沢から中軽井沢まで歩くといっても何ということもないと思った。そんなことを考えながら中軽井沢に向かって歩き出して、ものの5分と経たないところで、前を行く人影が見えた。その姿は紛れもなく松井だった。とたんに噴き出しそうになったが前の松井は知る由もなかった。結局、同じ中山道を、距離を置いて二人は別々に目的地に向かって歩いていたのだった。中軽井沢の中学校前で二人は再会。どちらからともなく、「一人で歩くのは詰まんないナ」と偶然、双方から言って大笑いをし、それまでの強がりやを互いに反省したのだった。

時間が4、50年以上も経過した現在、良く考えてみると編集長である松井の意見に従わなかった主務の自分の方が悪かったのかとしみじみ考えてしまう。しかし、若いということと、一緒に新聞を始めた者同士であること、お互い同級生だったことなどがあって一般社会のような上下関係という意識はそれほどなかった。会社生活を想定すると、この行動は大問題であろう。もっとも、「早稲田スポーツ」の中で、こうした幼稚とも思える仲たがいは他になかったかもしれない。しかし、今になって思うと、あの幼稚で単純な熱い争いがあったからこそ、「早稲田スポーツ」は誕生し、育ってきたのだと思う。

44 グランド坂下の居酒屋「志乃ぶ」

「早稲田スポーツ」の会長、清原健司（文学部心理学教授）さんは背も大きく体格の良い人だった。軽井沢の出身で旧制上田中学から早稲田高等学院へ進み大学では文学部へ入った。一度、清原さんの自宅で心理学とはどういう学問か、という話を松井と二人で聞いたことがある。詳細な学問のことは難解ですっかり忘れてしまった、というよりも理解できなかったというのが正直なところである。ただ、学位が医学博士であるということだけが、記憶に残っている。心理学が医学系に属する学問ということを初めて知ったのである。早稲田には医学部がないので、他の大学で学位をとった由。清原家のマンションの狭い書斎で、松井と二人でテーブルを囲んで先生と話し合ったことが何回もあった。これも創刊期の思い出の一つである。心理学のレクチャーがきっかけで清原さんには「早稲田スポーツ」に連載「勝負心理考」を書いてもらうことになった。

清原さんの思い出は、その真面目な性格とともにある。部の会合にはよほどのことがない限り出席するし、最初に必ずかしこまった話をする。それが嫌味ではなく、スポーツに絡ませた面白い話にするところが清原さんの特徴だった。また帰りには必ず会費を置いていった。苦しい部の財政事情を知り尽くしていたのである。私たちが清原家を訪ねる度に部の財政難

のことばかり話をしたのがいけなかったのだ。先生の気持ちの中にも「早稲田スポーツ」の資金難のことがすっかり入っていたのである。清原さんからは時に「今晚、志乃ぶへ来ないか」という電話が入った。「来ないか」ということはすでに先生は先に行っていると意味で、私たち、といっても大概是松井と自分の二人だったが、部の仕事を片付けてからグラウンド坂下の「志乃ぶ」へ行った。最初にお声がかかった時には、私たちはその「志乃ぶ」という店を知らなかった。大学の近辺で夜の飲み食いをした店は高田牧舎、金城庵くらいで他は昼飯で行くラーメン屋くらいだった。

「志乃ぶ」は、早稲田の野球部が毎日練習をしている安部球場の東側隣りといっても良いほどの距離にあった。安部球場は明治時代の社会学者で早稲田の教授・安部磯雄を冠にしている野球部のグラウンドである。安部磯雄は早稲田野球の父とも言われた人である。野球部のアメリカ遠征を実現させたことでも知られている。若い頃には新島襄の同志社に学んでいる。社会学者として、ロシアの作家トルストイとも親交があったと言われた人である。

最初に「志乃ぶ」へ行った時の印象も強く頭に残っている。二人で探しながら「志乃ぶ」へ行き思い切って格子戸を開けると、中はもうもうとした煙草の煙と焼き鳥を焼く煙、さらには美味しい味のおでんの湯気が混ざって煙っていた。それほど広くはない店の中は赤ら顔の人で一杯、私たちの顔を見るなり、清原さんは「ここだ」と言って手を上げた。大学の先生もこんな近くの店で帰りがけに一杯やっていたのだ。それにしても混み合っている。隣の人を「シンジョウさんだ」と言って紹介してくれた。最初はもちろん、どこのシンジョウさんか分からなかったが、話をしてゆくうちに文学部仏文学科の新庄嘉章教授だと分かった。フランス小説の翻訳家として有名な人だった。新潮文庫で良く名前を見る人だった。私たち二人はともに酒が弱かった。ビールをグラス2杯も飲めばもういけなかった。清原さんは残念そうな顔をしていた。しかし、この店の焼き鳥やおでんの味は絶品で、酒が弱くても食べ物目当てに来て良い店ではないかと思ったりした。店は年配の女将さんが切り盛りしていた。

その後、「志乃ぶ」には個人的にも随分通った。なけなしの金を持って安い酒を少々と思いおでんや焼き鳥を食べたものだ。まだ若く、酒は少々飲めたのだ。相棒は「早稲田スポーツ」の仲間かクラスの友人、写真部の今井隆一などであった。何回か通ううち、女将さんとも顔見知りになった。

大学卒業後、ある出来事のせいで「志乃ぶ」は、忘れられない存在になった。卒業後、何年か経ったころ、多分、現役の「早稲田スポーツ」部員との間で何かの会合があつて学校に行き、帰りに大隈講堂前を一人で歩いていた時、偶然、教育・国文の友人で競走部のマネジャーをしていた渡辺定恭が女性を連れて歩いているのに出会った。その頃、自分はすでに結婚をしていた。夕方であり久し振りの再会でもあったので一杯やろうと言うことになり、渡辺定恭も知っている「志乃ぶ」へ行った。女将さんは女性もいることだし、と言って3人を2階の座敷へ上げてくれた。「志乃ぶ」で2階へ上がるのは初めてだった。もちろん酒である。渡辺は秋田高の出身、東北人特有で酒が強い。連れの女性とは近々結婚するということで、3人の席はお祝いの宴席になった。日頃、酒に弱い自分も結構飲んだ。女将さんが良く

来てくれた旨のお礼を言いながら、酒と肴を二階に運んでくれた。いつも以上に酒を飲み肴としておでんや焼き鳥などもたらふく食べた。

深夜、家に帰ってからが大変だった。腹が急に痛み出し、どうにもならなくなり夜中になって近くの柏の病院へタクシーで行った。医者は食あたりだと言う。数日間、入院となり、なぜこうなったかを考えた。「志乃ぶ」で食べた何かにあたったとしか考えられなかった。後日、渡辺から会社から電話があり彼も自分と同じように腹が痛み苦しんだことを知った。しかし、結局のところ、腹の痛みも治まり腹痛の原因は分らず仕舞いだった。

すでに清原健司会長の「勝負心理考」のことを書いたが、草創期の「早稲田スポーツ」には多くの寄稿文を掲載した。それぞれのケースを全部記憶しているわけではないが4ページから8ページの紙面を埋める方法として寄稿文を使った可能性が高い。背景には私たち部員の取材・執筆能力の欠如があったのはいうまでもない。早稲田の学内・学外には、寄稿文を依頼したい人が数多くいたのである。個別の事情は承知していないが、新聞記事の作成能力に欠ける私たちは学内外の著名人に新聞を埋めてもらったのだと思う。学部の教授や運動部の監督、さらには運動部の部長職を務める教授は百花繚乱の如くいた。もちろん、時の総長大浜信泉氏にもたびたび紙面に登場してもらった。初期の「早稲田スポーツ」の縮刷版を繰ってゆくと実に多彩な人たちが載っていることに驚く。順不同に列挙すると、大浜信泉総長をはじめ、滝口宏、織田幹雄、河野一郎、八田一朗、安部民雄、赤松保羅、関根吉郎、上野徳太郎、末吉俊信、仁戸田六三郎など列挙にいとまがない。中でも山岳部を見ていた関根吉郎教授を見つけるのは簡単だった。それほど大きい人ではなかったが歩きに特徴があった。理工学部の教授だったが、まだ本部構内に学部があった。とに角、大股で歩く人で、遠くから見ても関根教授の歩きは直ぐに分かった。山登り特有の歩き方で、キャンパス内で一種の訓練をしていたのかもしれない。ほかにも文章を書いてもらうのにふさわしい人は大勢いた。依頼された方も、出たばかりの「早稲田スポーツ」に良くぞ書いてくれたものと感心するばかりである。さらに「早慶戦特集号」には、早慶両校の著名な野球人が揃った。座談会を開いたが、そこには森茂雄、上野精三、阪井盛一、相田揚一氏など早慶両校の錚々たる野球人が集まっている。

「早稲田スポーツ」を始めると同時に当然のことながら急に忙しくなった。しかし、あくまでも学生であることを忘れないように努め、授業には極力出席するようにした。それでも、新聞の仕事が多忙なため休むことが多くなった。一度だけ1年後輩の堤哲に必須科目の授業に出てもらったことがある。本来、このような代理出席は許されないことだったが出席しないと教職課程の単位に支障が出ると思い、窮余の策として決断した。後に、堤曰く「教育学部は出席を真面目に取るんですね」と不思議な顔で言われたことが今でも頭に残っている。

45 「早稲田学報」編集室

「早稲田スポーツ」をやっていた関係で学内でもいろいろなところで顔が知られるようになった。体育館、学部の事務所然り、また何人かの教授とは授業に関係なく知り合いになった。

また、ふとしたことから「早稲田学報」編集室に出入りができたことが、その後の早稲田の生活で役に立つことが多かった。中でも、まだ若い矢谷憲一さんを知ったことがその後の学生生活、さらには社会人となってからの生活でも大いに役だった。もちろん、「早稲田学報」編集室へ出入りしたのは「早稲田スポーツ」を創刊してからのことである。この時も、体育館事務所を通じて、学報編集室が「早稲田スポーツ」から話を少し聞きたいという連絡が入り、自分が出向いてゆくことになった。電話をしてきた担当の矢谷さんは、「早稲田学報」の何たるかを詳しく説明してくれた。「早稲田学報」は明治以来続く早稲田の校友のための雑誌で、昔は随分名の知れた作家たちも執筆をしていたという。傍らにいた落合東朗さんも、「早稲田スポーツ」に早くから注目して興味を持って見ていたと言う。落合さんは学者肌の人で、早稲田に関する多くの文章を書いていた。矢谷さんを通じて画家でもある藪野健さんも知った。この人は後に大学で教鞭をとると同時に早稲田の学内風景を多く書いた人である。矢谷さんから突然、「大学のスポーツ状況を書いてくれないか」と、冗談とも本気ともつかない口調で言われた。つまり、「早稲田学報」に原稿を書かないか、ということだった。このことは、松井にも報告したが、結局、話を聞いてきた自分が書くのが当然だと言われ、自分が書くことになった。話があってから、実際に原稿を書くまでにはかなり時間がかかった。自分たちが作る「早稲田スポーツ」以外に原稿を書くことなどまるで想像もしていなかったので、「早稲田学報」の原稿依頼はズシリと重い感じがしたものだ。「この雑誌は卒業生宛に何十万部も発行していて、権威と伝統があるんだ」と矢谷さんが小さな声で言ったのも気になるころだった。「早稲田学報」には古くは坪内逍遙や島村抱月、その他、早稲田出身を問わず多くの文人や経済人が文章を書いていることでも有名だったという。自分が書いたのは、結局「早稲田スポーツ」の紹介記事のようなものだった。この件があつて以来、卒業後も矢谷さんとは長い付き合いになった。当時、学報編集室は大学本部があつた政経学部の建物の1階にあつた。今でも、年に何回か「早稲田学報」に載っている「早稲田スポーツ」担当の「今年の有望新人」などという記事を見るたびに、こうした40年以上も前のことが思い出される。

余談だが、卒業後、矢谷憲一さんを通じて、藪野健さん描く早稲田のキャンパス画を1枚買うことにしていたが、実現しなかった。時代は違うが作家の重松清氏も一時期「早稲田学報」で働いていたと自らの文章で書いている。

46 続・体育館事務所の面々「早稲田スポーツ」の仮部室

すでに書いているが、再び体育館事務所のことを書く。何と言っても新聞創刊時の一番苦しい時期に事務所の一角を使わせてもらった恩のある事務所である。特に事務所内の電話や謄写版などを自由に使わせてもらった忘れ難いことである。「早稲田スポーツ」は創刊して1年が経過しても資金的な余裕はできず、絶えず資金的には不安定な状態が続いていた。それでも、部の運営にはいくらか落ち着きが出てきて、各運動部からも注目を集めるようになってきたと実感された。体育館事務所に主務（マネジャー）の何人かから「早稲田スポーツ」

についての質問が出た、と田古島浩さんから聞いたことがある。いよいよ各運動部でも「早稲田スポーツ」への関心が高まってきた証拠である。それでも私たちには相変わらず部室がなく体育館事務所の一角を半ば占拠する形で使わせてもらっていた。体育館事務所の仕事の一つに体育局から各運動部への連絡事項の伝達があった。その連絡役として各運動部のマネジャーが毎日のように事務所へ出入りし、大学、体育局などからの通達、連絡事項などを受け取っていた。従って、私たちは、仮部室になっていた体育館事務所にいるだけで各部のマネジャーと会うことができたのである。わざわざアポイントを取って各部のグラウンド、例えば東伏見のグラウンドなどへ出かけて行く必要が少なくなっていた。早稲田の運動部の本拠地は、野球や庭球、柔道、剣道など本部キャンパス周辺に練習場を持つ部を除いて、大半が東伏見にあった。東伏見には大学の広大な用地があり、各運動部のグラウンドや合宿所（寮）があった。各部の選手たちはそれぞれの合宿所に寝泊まりしているのが普通だった。水泳、ラグビー、サッカー、馬術などの取材があると、わざわざ早稲田から西武新宿線に乗って東伏見に行かなければならなかった。野球部の場合、例外で練習所も寮も大学の隣とも言える近さにあった。安部寮は大学から歩いてすぐの静かな住宅街にあった。練習場も大学に隣接した場所に安部球場と呼ばれるグラウンドがあった。終戦間際に「最後の早慶戦」が行われた球場である。野球部は資金的に余裕があって初代野球部長の安部磯雄の名を付して独自の野球場と寮を建設したのだろう。もちろん、大隈重信の深い理解があつてのことだろう。

私たちは体育館事務所にいるだけで、自然に各部のマネジャーの人たちと顔見知りになることができた。まだ会ったことがない部のマネジャーが来ると、事務所の田古島さんや五十嵐さんが、それぞれ紹介をしてくれる習慣ができたのである。

「早稲田スポーツ」を創刊した頃、部員全員が入学早々の1年生ばかりだった。運動部のマネジャーはほとんどが4年生、みな先輩だった。マネジャーの中には、体育局が中心となって新たに機関紙としての「早稲田スポーツ」を作ったのではないかと勘違いをする人もいたようだ。私たちは創刊半年も過ぎると、堂々と体育館の事務所に入り、事務所の職員と気軽に話ができるようになっていた。

体育局の上層部から特に指示されていたとは思えなかったが「事務所の事務機や電話などいつでも使って良いよ」と事務所主任の村田光敏さんから言われていた。これが当時の事務所の人たちの独自の考えで行っていたのかどうかは分からない。一挙に体育館事務所の電話料金が増えたのではなかったか、と心配もしていた。電話の恩恵は計りしれない。取材はもちろん、広告主とのアポイントをとる際には、特にありがたかった。また、先方から連絡をもらう場合など、連絡先が体育館事務所となっていると、信用絶大であった。広告主は、体育館事務所にある新聞なので、安心だと思っていたのだろう。「早稲田スポーツ」にとっては、部の誕生から日が浅いだけに電話代一つとっても、自前でやるには大変だった。第一、早い時期に体育館事務所の一角を借りられたので、自前の電話は入れていなかった。こうした目に見えない大学の支援が創刊間もない私たちには計りしれない恩恵だった。「早稲田ス

ポーツ」が何とかスタートが切れた理由の一つに体育館事務所の支援があったと言って良い。

体育館事務所主任の村田光敏さんは、大きな身体の人であった。次第に聞こえてくる話では、村田さんは、戦前、大相撲で活躍した関取の笠置山※の縁戚者だということだった。そう言われてみると村田さんの身体は関取そのものように大きかった。笠置山は早稲田出身の初の大相撲力士として有名な人である。村田さんは体格が大きいばかりでなく細かい所にも気が付く人なので、身体が大きい部員が多い運動部を統括するには打ってつけの人だったに違いない。普段、大きな身体を持て余し気味に黙って机に座っている時などは、一見怖そうに見えたが、一度、話をするといつもにこやかになり心優しい人だった。何か困ったことが起きると、いつも松井と二人で事務所の奥に座っている村田さんの所に行ったものだ。その延長線上で村田さんは松井と自分を自宅（板橋区大山）に招待してくれた。二人で大山の村田邸に行って食事をご馳走になったことがあった。

次席の田古島さんは、「早稲田スポーツ」が誕生して間もない頃に異動でやってきた。前任者は鈴木さんという細身の人だった。やっと鈴木さんに慣れた頃に代わって着任した田古島さんがやや大柄で太り気味だったため、余計に対比できたのかもしれない。この人は、目つきが鋭く一見怖い顔に見えた。初めの頃はなかなか口が聞けない雰囲気を持っていた。私たちがどうして体育館事務所に居候をしているのかについて良く知らされていなかったらしい。着任早々、田古島さんから呼ばれた。鋭い眼光の持ち主で、話をするのも緊張した。話すうちに顔つきとは違って性格の良い人だと分かってきた。

まず聞かれたのは「早稲田スポーツ」の発行の経緯だった。松井と二人で細かく最初からの経緯と趣旨を説明すると「うーん、金はどうなっているのか」から始まって大学では誰と誰に話をしたかなどとかなり細かいことまで聞いてきた。この最初の職務尋問のような対面がかえって田古島さんの心を和らげたようだ。翌日、体育館事務所の重い扉を開けると、まず田古島さんが手招きをして呼んでいた。「君らのことは良く分かった。運動部にとって、良いことなので頑張れ」と言う。きっと昨日のうちに体育局の誰かに私たちの新聞の詳細を聞いたに違いなかった。かなり好感を持ったようだ。村田さんが出勤する前に、すっかり私たちと田古島さんは打ち解けた間柄のようになっていた。田古島さんは応援部（リーダー）の出身で、団長役（主将）を務めていたらしい。当時から田古島さんは運動部OBの会「稲門体育会」の仕事を衆議院議員の河野洋平さんのもとで切り回しているとも聞いた。運動部にとっては大実力者でもあったのだ。その後も田古島さんからは他では得られないはずの情報を聞くことができた。このことは「早稲田スポーツ」にとって実に有効なものだった。

田古島さんとの間では最初の強面の対面からは想像もできないような良い関係が築かれていった。

五十嵐一幸さんという人がいた。この人はいつも笑顔を絶やさない真面目な人だった。私たちの「早稲田スポーツ」に関しても、何か厳しい質問をしてくるようなことはなかった。

あらかじめ、事務所主事の村田さんから話を聞いていたのかもしれない。そうしたことで、五十嵐さんはいつも私たちの味方だった。体育各部との実務をこなし、人付き合いが良かった。困ったことは何でも引き受けてくれた。私たちがいつまで経っても部室がなく、締め切りが迫った時など、困っていた時に助け舟を出してくれたのが五十嵐さんだった。大学の北西方向にある甘泉園奥の大学の施設、甘泉寮を手配して、宿泊ができるようにしてくれた。そのお蔭で私たちは安心して泊まりがけの編集会議ができるようになった。もちろん徹夜も可能だった。甘泉寮は、甘泉園公園の脇にあり、周囲は深い大木に覆われた静かな場所で編集会議などには格好の場所だった。何としても泊まれることが良かった。宿泊に使った建物は明治か大正時代に建てられた早稲田にとっては由緒ある建造物だと後で聞いた。当然、東京専門学校時代からの建物で、大学構内から甘泉園に移築されてきているものだった。甘泉園に隣接した場所に大学の宿泊施設があるとは想像もしていなかった。その後、新聞編集のために、五十嵐さんの紹介で、たびたび甘泉寮を使わせてもらった。

甘泉寮では「早稲田スポーツ」会長の清原健司教授を囲んでの懇親会を行ったり、部の忘年会をしたり、かなり利用した。横に軟式庭球部のコートがあった。編集で徹夜をして、朝の早い時間の授業に出るため、甘泉寮を出る時など、軟式庭球部の何人かが練習に励んでいる姿をよく見たものだ。そして、この軟式庭球部のコートを見るたびに、私たちは資金的な支援をしてもらった板野寿夫監督を思い出すのだった。私たちが編集や宿泊に使わせてもらった建物（文化財）は、現在は東伏見の校地へ移築され活用されていると聞いた。夜遅くまで使わせてもらった懐かしい建物を一度訪ねてみたいものである。

※笠置山勝一：現奈良県大和郡山市出身。東京・早稲田中学校、早稲田第一高等学院文科、早稲田大学専門部政治経済科へ転入、昭和 7 年（1932）大学在学中に初土俵。昭和 10 年十両優勝、新入幕、同 12 年関脇昇進。インテリ力士と言われ双葉山打倒の参謀役となり、安芸ノ海が双葉の連勝を止めた。「立浪三羽鳥」と呼ばれた。現役時代に昭和 20 年（1945）引退。断髪式は大隈講堂で行った。年寄・秀ノ山襲名。現役時代、早稲田大学から化粧廻しを送られる。現役時代から英字新聞を読み、小説、随筆、相撲評論を書く。（ウイキペディア）

47 体育局から「運動部創部 60 年記念誌」刊行の依頼

—「輝く早稲田スポーツ・60 年のグラフィック 60 年」の発行—

昭和 37（1962）年 3 月、私たちは 4 年生になる前に「早稲田スポーツ」の編集実務を下級生に譲った。大学では 4 年生になると卒業論文の制作や就職活動に力を注がなければならない。4 年生の 1 年間は普通の学生生活を送ろうと話し合った結果であった。それ以降、「早稲田スポーツ」では、3 年次が終わると次の学年に編集実務を譲るとというのが慣例になったようだ。ところが、4 年生になって間もない頃、体育局から大学創立 80 年、運動部誕生 60 年の節目に当たるので記念誌を発行したい、については「早稲田スポーツ」創刊メンバ

一に編集の一切を任せたい、という安井俊雄局長からの伝言がきた。私たちはようやく時間的な余裕ができ、かつ身体も楽になると思っていた矢先のことだった。日を置かずに体育局長の安井教授を訪ねると、安井さんは丸い顔を一層丸くして記念誌発行の構想を熱く語り始めた。こうなると、引き下がるわけにはゆかなかった。創刊号を出した直後の「早稲田スポーツ」に対する安井さんの怒りと、その後の連夜の安井邸での連続の特別講義を思い出さずにはいられなかった。何しろ、連続して1週間、いや、10日だったか、毎日、吉祥寺の安井邸を訪問して新聞に関する連続講義を聞いたことのインパクトがあまりにも強烈で、4年生になっても消えずに残っていた。新聞とは何か、新聞の作り方、取材の仕方、記事の書き方などを毎夜、直接聞いたのである。このことが脳裏をかすめる。記念誌の発行資金はすべて体育局が負担するので、記念誌を作って欲しい、編集を含め全てを私たちに任せるというものだった。「早稲田スポーツ」創刊の時の資金難を思い出すとまさに夢のような話である。

私たちは、一度、新聞制作の現場から引退を決めたものの、新たな課題がやってきたのであった。この要請で私たちにはゆっくりする余裕はなくなった。再び、私たちは鳩首を集めて記念誌の編集にかかった。スタイルもタイトルも、もちろん内容も全て任せる、しかも資金は体育局が出すという贅沢な条件だった。みんなが集まる前に松井と自分は、今回の記念誌発行についての責任者を山崎茂にしようとした。新聞創刊構想を練った松井が最初の編集長をやり、自分が2代目編集長をやった。最初からのメンバーで通常業務を続けていたのは山崎だけだった。福山龍介、本多統、原田貞雄、その他途中入部の同期の何人かもすでに部を去っていた。原田貞雄は授業料のために連夜、通信会社で仕事をしていて、「早稲田スポーツ」の活動どころではなかった。みんなが集まった席で松井から今回の体育局から要請は受けるとの強い決意表明があり、責任者を山崎にしたいと発言し、みんなの了解を得た。私たち4年生が記念誌発行に携わり、3年生以下が通常の「早稲田スポーツ」新聞を発行することも確認した。もちろん、異論が出るわけはなかった。大学では編集用の小部屋を体育局の3階に用意してくれた。何もかも「早稲田スポーツ」創刊の時とは雲泥の差であった。

山崎は「早稲田スポーツ」発行の時以上に情熱を燃やした。肝心なことはみんなで話し合いをして決めた。全体の構想や進捗状況のチェックなどすべてを山崎が中心になって行った。私たちには、担当運動部から創部以来の資料、特に昔の写真をできるだけ多く借りるという作業を受け持った。記念誌のタイトルを何にするかも大事なことだった。全てのことが体育局から任されているので、タイトルを決めるのも私たちの重要な任務だった。みんなで議論した結論は、なるべく写真を多く使い、見やすい本にすることだった。いくなればアルバムスタイルの本を発行することだった。

記念誌は早稲田の運動部発足60年を記念するもので、大学のスポーツへの対応と考え方をまず掲載すべきだという意見で一致した。そのためには、総長と体育局長の文章が必須になる。前述の通り、誰でもが見やすい本にするためには写真を多く使わなければならない

いため、各運動部マネジャーの協力は欠かせない。対象となる運動部は新聞創刊時と同じ応援部を含めて 39 部である。その数が多いため、借りる写真の整理だけでも大変な作業になることが予想された。「早稲田スポーツ」時代の担当を参考にそれぞれが運動部を分担して受け持つことにした。それでも記念誌発行の専任スタッフは責任者の山崎を筆頭に全員で 5 人だけ、これで十分な作業ができるわけではない。やはり、新 3 年生の力を借りなければ作業がはかどらない。後輩にかなりの力を借りたのだった。「早稲田スポーツ」を発行する以上のエネルギーが必要だった。私たちはそれぞれ担当する運動部のマネジャーを通じて、昔の運動部の写真を集めることにした。各部のマネジャー諸氏もこちらの申し出に幾分驚いたが、大学が発行する記念誌では全面協力するしかなかった。写真の他に昔の有力選手から学生時代の短い文章を寄稿してもらうことにした。この時代（昭和 37 の頃）には、まだ明治や大正時代に卒業した人たちも多くが健在だった。当然、人選について、安井局長はもちろん、体育館事務所の村田さんや田古島さんに聞いたのは当然だった。

思い出深い座談会を開いたのも忘れがたい。

「輝く早稲田スポーツ 60 年のグラフィック」誌上に掲載した座談会である。明治・大正時代に早稲田の運動部で華々しく活躍した人たちに集まって頂いたものである。この座談会は、安井体育局長の発案だった。安井さんは記念誌の発行主体の体育局長であるが、大正時代末期に早稲田に学んだ人でもある。安井さん自身、明治・大正期に早稲田で活躍した人たちから当時の運動部の状況を聞いたかったのであろう。座談会の会場は大隈庭園内の完之荘であった。明治・大正期の元運動選手たちが総勢 11 人集まり、司会を安井局長が行った。出席者は、明治・大正期のスポーツ界では名が通った人たちばかりだが、私たちには名前を見ただけでは、何のスポーツでどのような活躍をしたかは分からなかった。最高年齢が明治 38 年（1905）卒業生の加藤進さん（漕艇・水泳）である。当時、卒業後すでに 57 年が経っている。年齢としては 70 歳後半に達していたはずである。（もっとも、この文章を書いている自分の年齢は喜寿 77 歳、座談会に出席した人たちとほとんど変わらない）

参考までに座談会に出席した人の名前、所属運動部、卒業年次を並べてみる（敬称略）。

青木新九郎（水泳）明治 45 年
石橋貞男（漕艇）明治 43 年
泉谷祐勝（野球）明治 39 年
井出徳一（剣道）明治 42 年
内田庄作（競走）大正 13 年
加藤進（漕艇・水泳）明治 38 年
木村文一（ラ式蹴球）大正 12 年
松宮三郎（水泳・漕艇）明治 41 年
村井五郎（弓道）明治 41 年
矢崎豹三（弓道）大正 6 年

八十川武雄（庭球）大正 13 年

〔司会：安井俊雄（体育局長）大正 13 年〕

座談会の様子を山崎と一緒に見ていた（聞いていた）が皆さんカクシャクとしていて実年齢以上に若かった。上記の通りさまざまな運動部の出身者が集まった。また、出身の運動部をみると、二つの部に跨っている人が二人もいる。別項で書いたが、「早稲田スポーツ」に連載随筆を長期間書いた上野徳太郎さんも複数の運動部の競技会に出場したと書いているように、掛け持ちは決して珍しいことではなかったようだ。この座談会を読むと、今でも理解に苦しむ箇所があるが、それも時代の違いによるものだろう。この人たちが早稲田に学んだ頃は、まだ、創立者の大隈重信が健在の時代で、私たちに分からなかったことが多くあったのだ。また、二つの運動部に所属していた人が複数いるように、当時は運動万能の人が多かったのか、あるいは、まだ競技レベルが高くないために、運動神経の発達した人は二つの競技に出られたのかもしれない。

なお、座談会のタイトルは「われらが時代を語る」となっている。ユニークなのは、中見出しの表現である。書き出すと以下のようになっている。

- ・寛大だった大隈老侯
- ・何でもやった安部先生
- ・第一回早慶戦は 36 年
- ・毎日当番でボート借り
- ・五輪予選に出た野球選手
- ・政治記者がスポーツ担当
- ・尊敬された吉岡將軍
- ・禁酒で安部先生と仲直り
- ・エキサイトし早慶戦中止
- ・選手には寝耳に水の中止
- ・五人抜きで米俵を獲得
- ・弓道場は戸塚の土手に

上記の中見出しを見ただけでも、座談会の話がいかに面白かったかが分かる。しかし、時代が古く、十分に理解できない箇所もある。座談会には極めて貴重な資料が満載であり、「早稲田スポーツ」にとっても貴重な財産になったことは間違いない。

体育各部から集めた写真が山のように山崎の机の上に積まれた。次は、どの写真を記念誌に掲載するかで頭を痛めた。悩んだ時にはマネジャーを通じて、明治や大正生まれの当事者に直接会って決めなければならなかった。各部ごとに写真を多く掲載したが、合せて簡単な文章を載せることにした。これがまた、大変な作業だった。なにしろ、私たちも昔の

ことは分からない。写真の選択以上に当事者や昔を知る人を訪ねて話を聞くか、古い資料を当たって記録を見る必要があった。そうした作業を経なければ文章は書けなかった。

記念誌の大きさは写真を多く掲載するので、なるべく大きな本にしようと決め、結局、週刊誌よりも大きいA4版に決めた。タイトルと表紙の写真をどのようにするかで、久しぶりで激論となった。表紙のプランについても体育局からの注文はなかったので、私たちが決めなければならなかった。タイトルは「輝く早稲田スポーツ 60年のグラフィック」との案が出てすんなり決まった。問題は表紙写真であった。早稲田を代表するスポーツを表現することが絶対条件だと思い、そのように発言をした。例によって、松井と自分が議論の中心になった。野球が自分の担当というだけでなく、卒業生も含めて早稲田のスポーツと言えば野球が一番人気であり知られてもいる、と主張した。当然、松井は猛然と反論をしてきた。なぜ、野球ばかりに焦点を当てるのだ、から始まって「早稲田スポーツ」の精神は各部平等だ、と相変わらず創刊以来の主張を持ち出す。この議論は、昭和 35（1960）年春の早慶戦前に行った特集号発行議論と全く同じだった。記念誌は「早稲田にスポーツ発足 60 年」を記念して発行されるものであった。各運動部の創立は野球部、庭球部、漕艇（ボート）部が共に明治 35（1902）年である。従って、人気のある野球部も当然、表紙するには十分な資格があった。この時の議論は、1 年生の時の議論が力づくで決めたのと違って真面目な議論に終始した。多少声高になったが、力で結論を導き出そうとの考えはなかった。松井と自分は一步下がって、ここは記念誌の編集長である山崎の考えを尊重しようとの結論に至った。結局、山崎が中を取り持つように別案を考えるということで、この日の議論を終えた。山崎が持ってきた案の一つが、最終的に表紙に使用したボートの写真であった。漕艇部から借りた昭和 7（1932）年 5 月の早慶レガッタの写真であった。古い写真で当然、モノクロである。ちょっと暗い感じがしたが、一種哲学的な雰囲気を醸し出していることもあり、自分は納得することにした。松井も案外簡単に賛同した。ボートであれば個人の顔も出ず、チームとしての戦いが表現されている、というのが山崎の提案理由だった。記念誌の表紙は早慶レガッタの写真と決定した。自分は野球部の同期のマネジャー杉浦康之から借りてきた写真が大きな紙袋一杯になっていたのを記憶している。

記念誌の巻頭に当時の大浜信泉総長と安井俊雄体育局長が文章を寄せた。

大浜さんは「大学とスポーツ」と、安井さんは「早稲田体育の発展」と題して書いている。大浜さんは野球部が果たした国際親善の話を中心に書いた。特に「…早稲田スポーツは、群星の如く数多くの名選手を輩出されたばかりでなくいまなおスポーツ界の指導者層または報道陣営内に大きな比重をしめている。…」という文章が印象的だ。

安井さんは、「…体育活動による全人教育すなわち身体活動による体育、知育、徳育とであらねばならぬと同時に科学的研究の対象としてスポーツを取りあげるところに大学教育の一環がある。…」と早稲田の大学体育史の観点から述べている。

体育局刊行の「輝く早稲田スポーツ 60年のグラフィック」が出たのは昭和 37（1958）

年 10 月だった。話があつてから完成するまで約半年、この間の山崎の苦闘は大変だった。他の部員が集めてくる写真や文章の整理に気が抜けなかったばかりか全体の紙面構成をどうするかに頭を使っていた。各運動部のマネジャーを通じて借りてきた写真は体育局 3 階の記念誌編集室に山のように積まれたことが忘れられない。これらの写真を絶対に紛失しないよう気をつけなければならなかったのは当然であった。編集後記で山崎が書いた文章には当時の生々しい状況が述べられている。以下は抜粋である。

「…体育局から相談を持ちかけられたのが確か 5 月の初めだった…。…今年は早稲田大学創立 80 周年、おまけに早稲田体育 60 年という記念すべき年にあたっている。その意味でも責任重大。引き受けたからには後にはひけぬ、立派なものを作ってやろう、とばかり張り切ってはみたものの、アルバム編集にかけてはみんな素人、初めからテンヤワンヤ、一時はどうなるのだろう、と心配もしたが、やっとのことで、どうにかこうにかアルバムらしきものが出来あがったので、一同ホッとしているところである。…写真集めに始まって校正を終えるまで、仕事は山ほどあつてつきることがなかった。局の 3 階に泊まって徹夜で頑張った時もあった。最後の夏休みもボウにふった。みんなはほんとに協力して頑張った。兵糧不足と経験不足とが相まって随分手間取ったし、取材の面などでは、先輩の方々にも大分迷惑をかけた…」

この文章に編集長の重責を果たした山崎の気持ちが十分に表現されている。山崎の頭をかきながら部屋に入ってくる姿が目に見えるようである。記念誌の必要資金が確か 100 万円だったと記憶している。現在の貨幣価値で換算するといくらになるだろうか。(注：ちなみに昭和 38 年 4 月に会社に入った時の初任給は 1 万 6000 円ほどだった)。

最初に安井さんから記念誌発行の話があり、自分たちが引き受けると決まって直ぐに現金をもらった記憶がある。100 万円を渡すので、君たちが思うように記念誌を作ってくれ、と言われた記憶もある。安井体育局長の私たちに対する信用が厚かった証拠でもある。記念誌の発行部数がどのくらいだったかは定かに記憶していないが、300 部から 500 部くらいだったのではないかな。

寄稿文について記したい。

「オリンピック参加の思い出」の項に出稿しているのは、

深沢政介(明治 39、漕艇部)、麻生武治(スキー)、織田幹雄(昭和 6、競走)、
風間栄一(昭和 14、レスリング)、堀江忠男(昭和 11、ア式蹴球)、堀江喜三(昭和 19、ヨット)、石丸利人(昭和 29、ボクシング)の 7 人。

また、「懐かしい学生時代」というタイトルの談話形式で載っているのは

浅岡信夫(大正 13、相撲、ラグビー、水泳、競走、柔道)、石黒敬七(大正 11、柔道)、上野徳太郎(大正 13、水泳、競走、ラ式蹴球)、小沢信三郎(大正 10、ヨ

ット)、河野一郎(大正 12、競走)、正住弘(昭和 10、体操)、竹節作太(昭和 4、スキー)、仲村勘治(昭和 8、相撲)、森茂雄(昭和 6、野球)の 9 人である。

なお、記念誌には先に書いた特別座談会が載っている。明治、大正時代に卒業した錚々たる人たちが集まって、安井局長自らが司会役を担った。安井さんが最年少者で、座談会の席では多少かしこまっていた感じがしたのも忘れがたい思い出である。出来上がった「輝く早稲田スポーツ 60 年のグラフィック」は体育局を通じて関係者あてに配布された。配付に当たって、安井局長は以下の文章を記念誌に添付した。

拝啓 …陳者大学は本年を以って創立八拾周年を迎え、先般記念式典も滞りなく終了致しましたが、我が運動の部も明治 35 年体育部として発足以来本年が六拾周年に当たりますのでこれを記念し、資料の一部にもと存じ「輝く早稲田スポーツ」を編輯、今回発刊の運びと相成りましたので関係各位に頒布申し上げます。御笑納下さらば幸甚に存じます。先、右の次第迄

敬具

早稲田大学体育局

局長 安井俊雄」

出来上がった記念誌を見て私たち編集に携わった者は仰天した。至る所、ミスのオンパレードである。特に校正ミスが多かった。また、ぎこちない割付や稚拙な文章が多く、何とも面目がない記念誌でもあった。また、各ページにページ数が入っていないので、何かと不便だった。ミスに気がついたのは当然のことながら記念誌配布後のこと、訂正のしようもなかった。ちなみに編集後記に書かれている編集員の名前は、宇野英雄、中野邦観、西川昌衛、松井盈、山崎茂の 5 人であったが、自ら校正をしたにも関わらず自分の名前が西川晶衛になっていた。まさに笑止千万のミスである。

48 スポーツ万能の人・上野徳太郎さん

「早稲田スポーツ」にとって忘れられない人に上野徳太郎(大正 13 年卒)さんがいる。体育館事務所の村田光敏さんの話がもとだった。村田さんは早稲田にはいろいろな人がいるので、紙面に登場してもらったら、との助言である。その中に上野徳太郎さんがいたのだ。

体育局で水泳などを教えていた上野徳太郎さんは特異な人だった。この先生との出会いは村田さんの話が頭にあった上に、偶然どこかの新聞紙上で上野さんのことを読んだのがきっかけだった。時期は新聞創刊の直後だったか。何でも古式水泳の専門家だという。しかも早稲田の教授ということも知った。一度会ってみたいと思い、体育局へ行き上野さんが大学へ来る日を聞いた。すでに上野さんは 60 歳近い人、高齢と言えば高齢であったがまだカクシャクとしていた。また、話す内容が面白い。自分は水泳の古式泳法の伝承者だが学生時代はスポーツ全般に通じ、水泳、陸上など各種大会に出ていたと言う。この水泳の

選手でありながら陸上競技でも大会に出場したということがユニークである。このユニークな先生の話をぜひ「早稲田スポーツ」に掲載し学生に読んでもらいたいと思った。直接本人に会って、恐る恐る連載原稿の話をすると、案外、簡単に承諾した。なぜ恐る恐るかと言えば「早稲田スポーツ」には原稿料を払うだけの余裕がなかったからである。新聞の会長である清原教授も原稿料なしで連載記事を書いてもらっていること、「早稲田スポーツ」は創刊間もなく財政的に楽でないことを話すと、「もちろん不要」の一言。原稿料なしで毎号原稿を書く約束してくれた。書く材料はいくらでもあるし、いつでも書けると言っていた。同時に上野さんは君たちの新聞は立派なものだ、これからは頑張れよ、いつも励ましてくれたものだった。ほどなく、上野徳太郎さんの連載エッセー「随筆 あの日あの頃」がスタートした。先生の原稿は決まって体育局の事務所に預けてあり、それを受け取りに行った。毎月、指定の日に決まって原稿は届いていた。その頃の上野さんは実に元気で時折、走るように構内を歩いている姿を見ることが多かった。明治生まれの律儀な先生だった。

上野さんの連載は昭和 35 年 10 月号（第 9 号）に始まり、昭和 40 年 9 月号（53 号）まで続いた。ほぼ 5 年間続いたことになる。上野さんは 63 歳になっていたはずだ。初期の「早稲田スポーツ」にこれほど長期に亘る連載をこなした人はいない。まだ自分が学生でいた頃、上野さんに、「早稲田スポーツ」に書いた文章をもとに本を出しませんか、と聞いたことがある。本人はただにっこりして、まだまだと言うだけだったが本心はどうだったのかは知る由もない。もっとも、「早稲田スポーツ」はまだ草創期のことで、とても本を刊行するだけの余裕はなかったのが本音であった。その後の上野さんの消息は分からない。ただ、お嬢様がオリンピック・スキー競技のメダリストに嫁いでいるようだとの噂を聞いたことがある。上野さんは早稲田のユニークな先生の一人であったことは間違いない。

49 新聞印刷代の支払いに窮した頃

話が前後するが、新聞印刷代金の支払いが遅延した頃のことを書く。

「早稲田スポーツ」は、創刊後 2 年目を迎え、学内での認知も高まり部員も複数学年にもわたり、10 人以上になった。部の活動にはいよいよ活気が出てきた。紙面も「墓場見出し」や「腹切り」といった新聞作りのタブーも克服し、部員も毎月の取材や原稿書き、広告取り、割付作業にも苦痛を覚えなくなってきた。松井体制の 2 年目が順調にスタートした。

ただ気がかりになっていた資金問題は相変わらず「早稲田スポーツ」の最大の課題になっていた。かなりの額になっていた印刷代の支払いや板野寿夫さんへの借金返済が大きな問題だった。広告収入がいくらか増加したとはいえ、まだまだ満足な収支バランスは取れなかった。ということはまだ板野さんへの借金返済は猶予してもらっていた。それに、前年の後半には、すでに新聞社への印刷代の支払いに窮し、一度、松井の母親・澄子さんから支援を受けるという苦痛を味わっていた。神奈川新聞との縁がある松井の母親にとって

は息子が創刊した新聞の印刷代が支払えないのでは面目がない。そうした折に、私たちは彼の母親に事情を話し、支援を頼んだのであった。彼女にしてみれば、息子たちの活動を全面的に理解した上で、「早稲田スポーツ」の印刷を神奈川新聞社へ紹介をしたのだった。その後、資金が足りないといって不払いはできない、と私たちの援助要請をうけて一時立替支払いを承諾してくれたのだった。彼の母親の好意は身に沁みてありがたかった。このことがなかったら、もしかしたら「早稲田スポーツ」は廃刊の可能性が大であった。このことを思うと今でも冷や汗が出る。しかし、大学生の親が、いくら息子が中心になって起こした新聞であっても資金立替を行うであろうか、と自らの立場を考えるとゾッとする。

それでも、部の資金改善は進まず、神奈川新聞社への支払いが順調に復することはなかった。そこで、一案が出た。止むにやまれぬ策の実行である。当時の部員に、年間の月謝相当分を借りることだった。確か、月謝納入時期の頃だった。全員に借りたわけではなかったがかなりの人が応じてくれた。この場合、誰が責任を取るかなど全く考えなかったところがやはり学生の策であった。一種の楽観論が部内を支配していたとも言えよう。あまり時間を経ずに早慶6連戦があり、早稲田が優勝して「早稲田スポーツ」が大量に販売でき、借入金の返済ができたことなど、実は誰も予想ができなかった。学生の会としてはとんでもない経験をしたことになる。こうした事態は二度と引き起こしてはならないという教訓の気持ちでこの文章を書いた。もっとも、この苦しみがあって「早稲田スポーツ」が生き残り、半世紀以上にわたって発行が続いたと言えるのかもしれない。

創刊2年目に入って、私たちの目算もいくらか計算できるほどになってきた。学内での販売に加え、春秋の神宮球場での早慶戦が大きな収入源だった。6月と11月の早慶戦の時期が楽しみになった。創刊間もない新聞が飛ぶように売れるのだった。スタンドに陣取る学生が、「早稲田スポーツ」を握っているのは嬉しかった。早慶戦特集号を2年目の春から作ったものの、まだまだ十分な取材もできず文章も上達せず、新聞自体も未熟だった。それでも次から次へと学生の手が伸びて新聞が売れたのだ。私たち全員が販売員になって、神宮のスタンドの周りを束になった重い新聞を抱えて歩きながら売った。球場の周囲は歩くとかかなり長いものだ分かった。また、野球部の計らいで何人かはスタンドに入って販売した。創刊以後1年も経たないうちに発行した「早慶戦特集号」は今後とも「早稲田スポーツ」にとっては大きな収入源になると確信した。

早慶6連戦以降、「早稲田スポーツ」では春秋の早慶戦特集号は継続して発行されている。もちろん既述の通り、最初に「早慶戦特集号」の発行を決める時の松井と自分との「激論」があつてのことだ。また、2年目の秋、昭和35年11月発行の早慶戦特集号には特別な思いがある。みんな取材時から熱が入っていた。学生野球の神様、早稲田野球の産みの親、と言われた飛田穂洲氏に会って、早慶戦の意義を時間オーバーしながら聞いたこと、さらに両校のグラウンドへ行って、両監督の極めて対照的な練習方法を見たことなど、さまざまなことを経験した。新聞制作の喜びを知った時期でもあり、新聞編集の冥利を知った時でもある。昭和35年秋の「早慶戦特集号」の販売が、その後の「早稲田スポーツ新聞」の命運

を決したと言っても過言ではない。それほど早慶6連戦は「早稲田スポーツ」にとっては運命的なものだった。

50 「早稲田スポーツ」2代目編集長に就く

早慶6連戦が「早稲田スポーツ」にもたらした影響は、財政問題の改善ばかりか部の運営に対しても好結果をもたらした。通常の新聞発行では地道に広告収入を確保し、地道に構内で学生相手に新聞を販売することだったが、早慶戦の時は大学での新聞販売とは全く違うものがあった。早慶戦は、通常の販売形式というか販売量とかもまるで違った。特に昭和35年の早慶戦は私たちの総てを変える劇的な様相を呈し、結果も信じられないほどの好結果をもたらしてくれた。まさに私たちの通常業務をさえ一変するものだった。

「早慶戦特集号」の販売はかつての新聞販売を変えたのである。大量販売の様子を見ていた「早稲田スポーツ」の部員には全てが初めての経験であり、その後の部活動に熱が入ったのは言うまでもない。新聞が売れば部の経営は安定に向かう。新聞が売れることの意義を明確に知ったのも早慶6連戦であった。

昭和三十年代後半から、学生野球の観客動員は衰退期に入り、代わって出てきたのがラグビーであり、サッカーだった。しかし、ラグビーやサッカーの人气が全国的なブームとなり、「早稲田スポーツ」紙上にも大きく取り上げられるようになるのはもう少し後のことになる。むしろ、自分たちが卒業してからのことである。

「早稲田スポーツ」も、毎月、一定の販売部数が読めるようになり、部員数も安定してきた。学年も数年にまたがり部活動も安定してきた。そうした変化も「早慶6連戦」を境としていた。年の暮れごろに明確な変化の兆しが見えてきたと言える。

この頃、松井は真面目な顔で切り出した。「このへんで、編集長を交代したい。ついては最初から一緒にやってきた仲間なので、ぜひ引き受けてくれ」、と言い出した。唐突な申し出に慌てると同時に面食らってしまった。「早稲田スポーツ」は、松井が言い出して誕生した新聞なので卒業するまで松井が責任を持って編集長の職を全うすべきだと思っていたからである。固く辞退したが、彼は全く受け付けようとしなない。松井は「引き受けないと駄目だ。二人は同級生なのだからここで代わり、また1年経ったら後輩に引き渡すべきだ」と一歩も引かなかった。その日、結論は出さずに別れた。実は予兆があった。夏の信濃追分・清原別荘で初めて行った「早稲田スポーツ」の合宿の席で、松井が発言した「早稲田スポーツ年鑑」発行問題である。松井は、「早稲田スポーツ」の経営にも安定化の目が出てきた今こそ長年の懸案を実行に移す絶好の時期と考えたようだ。二人の間で押し問答のようなやり取りがかなりあり、「編集長が代わっても、自分は全面的に支援する。というより、この新聞を長く続けたいから代わるのだ」と松井は言い、後には引かなかった。彼にすれば、早慶戦特集号問題で同期のみんなの前で激論を闘わし、甘泉園の広場まで行って力づくの争いまでした二人の仲を大事にしたかったのかもしれない。二人は、真剣に「早稲田スポーツ」の経営を考え、今後の行く末を真剣に考えてきた。結局、自分はその後間もな

く彼の言い分を聞き、「早稲田スポーツ」の編集長を引き受けた。昭和 35 年（1960）12 月 11 日発行の第 12 号から、自分が編集人となった。これが「早稲田スポーツ」の 2 代目編集長引き受けのあらましである。

何かの責任者の役目につくのは田舎の小学校の級長と中学校（ともに千葉・柏）のクラス委員長くらいしかなかった。全く自信がなかったが、いつも通り編集業務に努め、広告収入の増加策の実行に取り組むほかはないと思った。ただ、創刊以来のメンバーからは福山龍介と本多統の二人が自然に部から去っていた。また同期で入部して来た安武哲夫、浅野展行、それに勉強好きの津本信博も静かに部を去っていった。ただ、津本信博の場合、向学心の強さを早くから見ぬいていたため、学究生活への道を自分から後押しした形での退部だった。残るは山崎と原田貞雄の二人と宇野英雄、中野邦観であるが、彼らとの関係は以前と同様に自然な形を保っていた。後日、彼らにも松井からの申し出を相談したが、「引き受けろよ」と簡単に言う。つまり、同期の友人は、松井が言い出した編集長交代に全く異議を出さなかった。これも、「早稲田スポーツ」2 代目編集長を引き受ける大きな要因になった。しかし、ここは気取ってもいられない。これまでと同じようにみんなと話し合いを続け新聞を発行して行くのが一番大事なことで決めた。自分には松井のような強烈な個性もなく、通常通り学生が求めるスポーツニュースを追いかけ、新聞を発行するのが使命だと信じて「早稲田スポーツ」を継続して発行するのみだった。

「早稲田スポーツ」の業務が夜遅くまで続いた。柏の実家に夜遅く帰って自室の布団の中から天井を見つめる時など、大変な任務を引き受けたものだと、物思いに耽ることがたびたびあった。自分が編集長についた 2 年生（1960 年）の秋には、すでに正規に入部して来た後輩たちが十分な戦力になっていた。「早稲田スポーツ」の体制は大きく変わっていたのである。遅く入部して来た同学年の宇野英雄や中野邦観ももちろん、戦力的には問題がなかった。少し前に入部の 4 年生部員も戦力だった。ようやく「早稲田スポーツ」も賑やかな雰囲気を持つ部になってきた時期である。

松井は編集長を離れても、以前と同じように担当部を持ち、いつもと変わらない運動部の取材を続けた。編集会議でも大いに発言をした。いい形で編集長交代ができたと思った。ただ、後になって考えると、悪い意味ではなく、編集長交代の裏には松井の周到な計画があったと思えてならなかった。彼の胸の内には、前年の夏合宿で発言した「早稲田スポーツ年鑑」発行の夢が消えずに、むしろ増殖していたのである。「早稲田スポーツ」の編集長を継続しては、とても年鑑発行の時間はとれない。早慶 6 連戦が終ったあたりから自然な形で編集長交代をするにはどうしたら良いかを考えていたようだ。まず、体制作りから手を付けたと思えてならない。

自分は 2 代目編集長に就いてからも、創刊以来続く 1 面最下段のコラム「アウトライン」を担当し苦戦しながら書いていた。このコラム名については、いささか後悔していた。「アウトライン」が、おとなしすぎるタイトルだったからだ。もっと核心をついた名前にすれば良かったと思っていたのだ。担当運動部のうち、野球部については、人気の部である以

上に取材範囲が広いこともあって、一人で受け持つには大変で、1年後輩の堤哲（早大学院）に交替した。1年後輩には粒ぞろいの逸材が揃った。以後、彼らの活躍がなければその後の「早稲田スポーツ」の継続・発展はなかったと断言できる。同期の中では堤哲がリーダー格となって、いろいろな問題に対処したようだ。ほかに、堀健雄（板橋高）と山崎英夫（春日部高）、佐々木勝衛（野沢北高）、鈴木克己（北園高）がいた。堤、堀、山崎の三人の働きが特に大きかった。堀健雄は、いかにも東京っ子らしい青年で割合おとなしかったが芯は強い男だった。山崎英夫は埼玉・吉川町の出身で高校は名門春日部高、陸上競技部に所属し投擲の選手でインターハイにも出場したという。芯の強い男だった。この3人はみんな背の大きい好男子で、背の低い私たち1期生と並ぶと極端に違いが分かるほど対照的だった。

新聞創刊の年の秋か冬かに、やっと女性部員が入った。逸見素子（日本女子大付高）さんである。入部してもらったものの、彼女には大変申し訳がなかったと思う。満足な業務もなく、どちらかと言えば、仮事務所にしていた体育館の一角の掃除ばかりをやってもらっていたような気がする。大熊千種（東洋英和高）さんが入部してきたのは少し後になるだろうか。逸見素子はいつも大きなテーブルの上を片付けたり雑巾で拭いたりしていた。この作業を誰が指示したのかは知らなかった。むしろ、あまりにも整理整頓がなっていない男だけの仮部室の整理を自ら進んで始めたのではないだろうか。彼女の日課だったのかも知らない。むさ苦しい男ばかりの中に若い女性が入ってきたので、部の雰囲気も明るくなった。それ以上に部屋が綺麗になったことはこの上ない喜びだった。逸見さんの在籍期間がどれくらいだったのかははっきり分らない。なかなか女性部員が入ってこないこともあって、彼女は部から離れていったのだろうか。私たち創刊メンバーにとっても、初めての女子学生の入部であり、上手く働いてもらうコツを知らなかったのが彼女には不幸だった。新聞記事を書くために入部してきたのに、毎日、テーブル掃除では堪ったものではなかったはずだ。逸見さんと大熊さんとが揃って「早稲田スポーツ」にいたことはあったのだろうか。大熊さんの入部は逸見さんが部を去ってからだったかも知れない。大熊さんも逸見さん同様に素直な性格が良い人、真面目で気が利く人だった。私たちがもっと積極的に彼女たちに接していれば頭脳明晰な二人の特徴をうまく引き出すことができたのではなかったか。彼女たちも存分な活躍ができたことは間違いがない。

逸見さんのことで印象的なことが記憶にある。彼女は日本女子大付属高の出身で、多くの友人が目白の女子大に進んだようだ。ある日、彼女が一人の女子学生を連れて来た。今ではどこの大学のサークルにも他大学の学生がいるらしく、決して珍しいことではないらしい。この女子学生が「早稲田スポーツ」に入部したいという。しかし、私たちは彼女の扱いに頭を抱えた。創刊間もない頃で、他大学の学生を部に入れてよいのかに困ったのだ。実際は部員が一人増えるという良いことだったが、私たちは結論を出せないままにいた。すると、女子大生は居づらくなったのか自然に姿が見えなくなった。この学生がいつまでいたのか定かではない。逸見さんは、文学部英文科の学生だった。教育学部で国文学科に

在籍する私たちは英語が出来る彼女を羨ましく思っていた。いかにも真面目、と言う性格が顔に出ていた。仕事（雑用だったが）を頼むと何でも早くこなした。最初は知らなかったが、そのうち彼女の父親がドイツ文学の逸見廣教授だとわかった。

逸見廣教授は、何代目かの「早稲田文学」の編集責任者をした人で文学通には知られた人である。しかし、別の意味で、これは大変なことになったと思った。逸見教授の授業「小説概論」を取っていたが、あまり授業に出られなかった。もちろん、「早稲田スポーツ」のためとは言いたくなかったが、やたらに忙しい時期であったのは間違いない。逸見さんが部活に慣れて、みんなと話をするようになった頃、自分は定期試験を受けた。あまり授業にも出ていなかったのので、結果は期待できなかった。ある時、彼女に「家で、点数を見てきてくれないか」と、彼女にしてみれば失礼千万な注文を言った。まず、不可能だろうと期待しないで待っていたら、後日、彼女から「65点でした」という答えが返ってきた。お恥ずかしい話であった。やっと及第点である。彼女がどのような形で自分の答案を見て来たのかについては詳しくは聞かなかった。

大熊さんは私たちより1年後輩の堤哲たちと同学年だった。東洋英和の出身で第一文学部の美術専修に在籍していた。もう少し長く逸見さんがいたら、二人は一緒に仕事ができ、早稲田スポーツの中身も評価も違ったものになっていたのかもしれない。大熊さんから専攻が美術だったと聞いて、自然に自分の早稲田受験時の安藤更生（仏教美術）教授の質問を思い出す。自分は安藤教授の厳しく破天荒なものの言いの面接試験を通して第一文学部美術専修に合格した。安藤教授は、「親がここを受けていることを知っているか、まずまともな就職は無理だ」と受験生には意味不明なことを言った。自分は散々迷った挙句、既に合格していた教育学部国語国文学科に入った。もし、一文に行っていたら専修も彼女と同じで1年先輩になっていたはずだ。世の中には不思議なことはいくらかもある。

「早稲田スポーツ」の編集長をしていた頃、実はその重責をあまり意識したことはなかった。新聞創刊以来、いつも同じ顔が周りにいたからである。ただ、入部、退部など部員の出入りにはかなり気を使ったものだ。特に、同学年の退部にはかなり神経を使った。何が原因なのか、何か部員同士の軋轢があったのかと気になったものである。一番困ったことは創刊以来の部員で、途中から部会などに顔を見せなくなった人たちの処遇である。除名や退会命令などは出しにくいし、実際はできなかった。当事者からもはっきりとした申し出もなかった。こうした件を曖昧なまま後輩に引き継いだことが自分の気持ちの中では重く残った。しかし、「早稲田スポーツ」の名が学内で知られるようになり、構内販売でも徐々に成果が出てきたことで、自分の「早稲田スポーツ」生活は全般的には楽しいことが多かったと言える。2年目の秋の早慶6連戦が飛び切り良かった思い出である。その好影響で部の財政に多少のゆとりが出来たことが大きかった。いつもカネ・カネと追いまくられていた感じがいくらか消えてきたのだ。それに新聞発行に熱心だった後輩が多く入部して来ていることが、実は一番大きな収穫だったと言える。